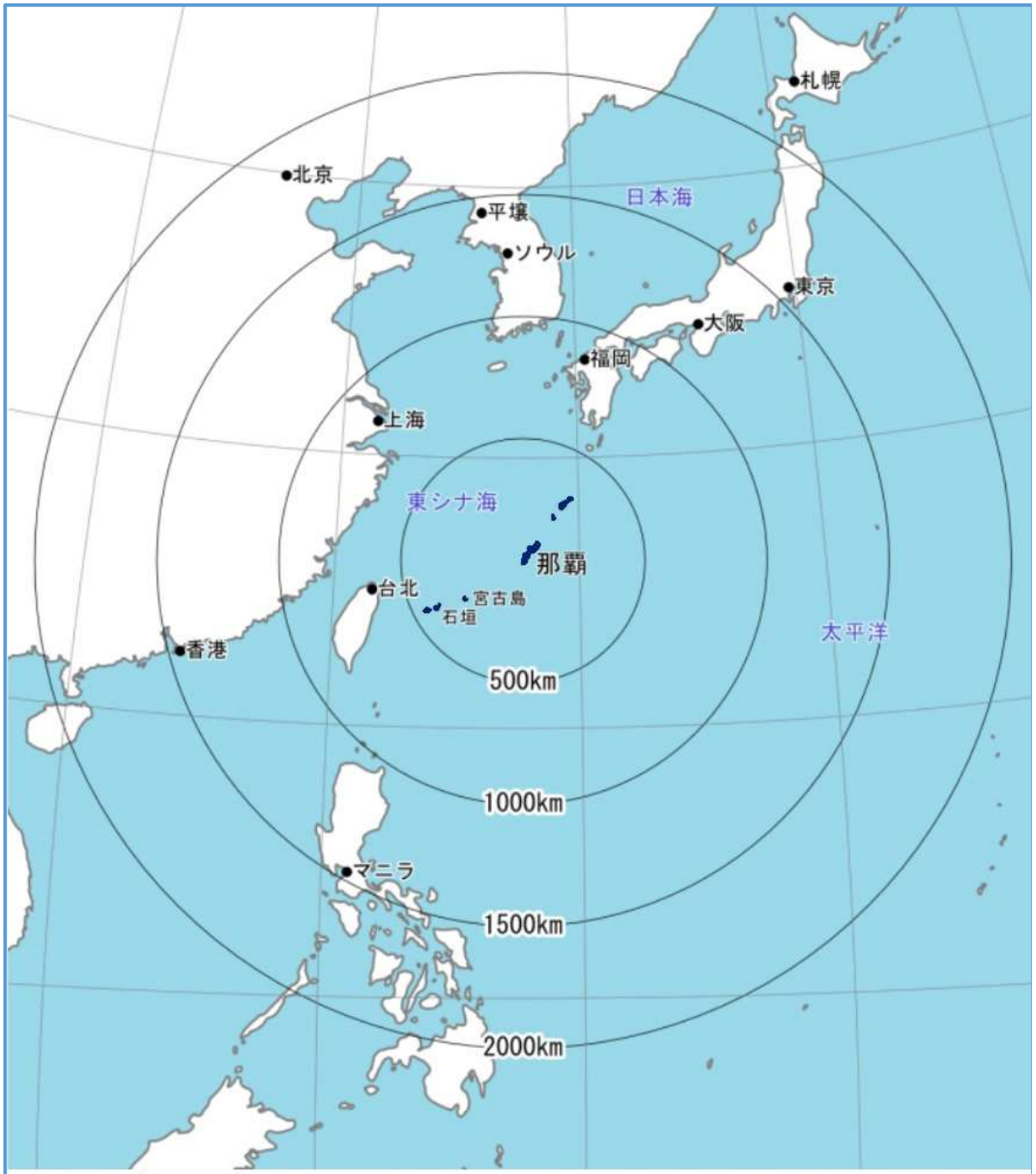
日本人の起源

基本レポート

「沖縄の古代歴史の真実は？」



※同心円中心は那覇市　　沖縄県のHP　沖縄県の位置より

2021年7月31日
丸地　三郎

柳田国男の「海上の道」

- **柳田国男は、**
  - 琉球王朝の外交資料に有った**「海巴」が宝貝に違いない**と推定し、
  - 日本人の祖先は、
    - 宝貝を求めて中国本土から沖縄に渡り、
    - 稲作を持ち込み、
    - 琉球列島から日本本土に渡った
  - それが日本人の祖先だとする「海上の道」の説を確立しようとして
  - 晩年、沖縄に渡り、その証拠を集めようとした。
- 根拠としたことの一つは
  - 伊波氏の書かれた「子安貝の琉球語を中心として」という一文に、宣徳九年（一四三四）という年に、明の朝廷に輸送せられた琉球の貢物目録には、**海巴**　五百五十万個という大きな数字が見える。 と記す
  - ✓ しかし：　日本でいう**子安貝**、すなわち**海巴**または**宝貝**のことだと言い切ろうとしていたのであるが、それはやがて証明し得られるかも知れぬ**仮定に止まって**いた。

- 島崎藤村の「椰子の実」の詩は、歌となって記憶されてきたが、

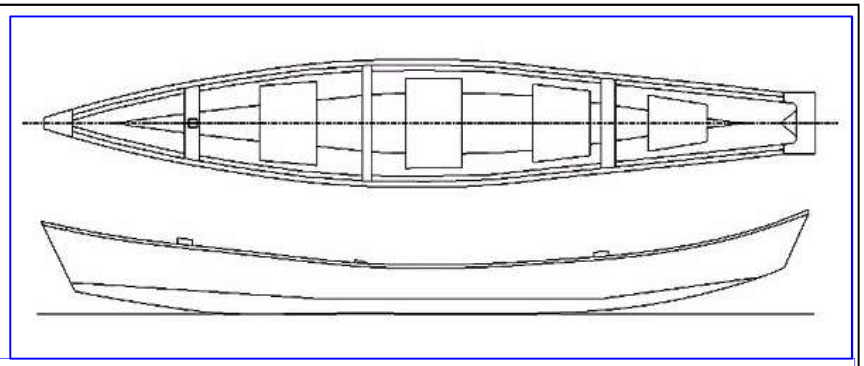
  1961（昭和36）年に発刊された「海上の道」は、 証拠がないため、忘れさられようとしていた。

- 今でも**宮古島**周辺の貝類採取地として年々多数の小舟（さばに）の集まっていたのは、北には沖縄本島への航路に接して、八重干瀬（やえびし）という広大な岩礁（がんしょう）地域があり、 と「海上の道」に記され、宝貝の産地ともくされる。
  - 宮古島は、古い伝承が伝わる島として、民俗学研究者たちが注目している。
    - この宮古島に注目して行く。

サバニ沖縄の小型舟

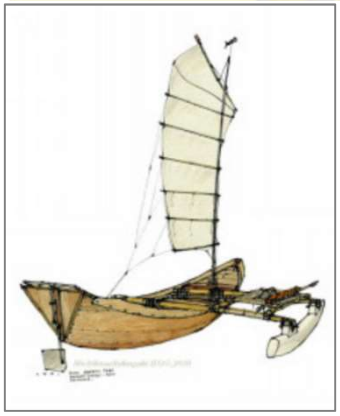
- 沖縄独自の小型舟の『サバニ』
  - サバニの原型は独特の船型で、
    - 造波抵抗が少なく、
    - 保針性

    の良さも好評である。

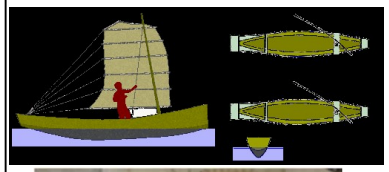


http://yaeyama.main.jp/sabani/talk.htm　新城師匠かく語りき・・・サバニ対する師匠の考えより

  - 沖縄と東ドイツの湖沼地域には、きわめて優秀な性能と性格に到達した艇群が現存し、沖縄では「サバニ」、ドイツでは「ヨレ」と呼ばれるが、相互の連絡は全くない。
  - 第一回目のアメリカズカップ日本チャレンジ艇は、このサバニの船型を元に作られた。



- 沖縄に伝わるサバニは、卓越した船型を持ち、帆を張り、高速で航行した優れた舟。
  - 荒天に際しては、水舟にして、天気の回復を待ち、生き延び、復帰することで、使われて来た。
  - 必要に応じ、アウトリガー付き、二艘連結、四艘連結を行い、安定航行と積荷の増大を図る。
    - 戦後（第二次大戦後）2艘連結の帆付サバニに山羊を乗せて、東南アジアへ航海し、出稼ぎをした沖縄人もいたとの話がある。



- 多数のサバニが使われた。
    - 18世紀初、琉球王府の布告によると、2,700余艘存在とのこと。

サバニ沖縄の小型舟

- サバニは、元来、一木を刳り抜いた丸木舟（刳り舟）であったが、やがて琉球王府の山林保護政策から剥ぎ舟への転換が図られた。（豊見山 和行著 「船と琉球史— 近世の琉球船をめぐる諸相—」）

慶良間の博物館にある丸木舟のサバニ
http://takezoumaru.blog.fc2.com/blog-entry-260.html
湯河原・真鶴／野生生物探検隊　より

- 現在のサバニは板材を接合した舟だが、それ以前は「刳り舟」で丸木から削りだす丸木舟であった。

  1737年琉球王府は、進貢船用の大木が減少したため、原因となる、「刳り舟」を禁止したが、長期間、守られず、「刳り舟」が長く使われた。

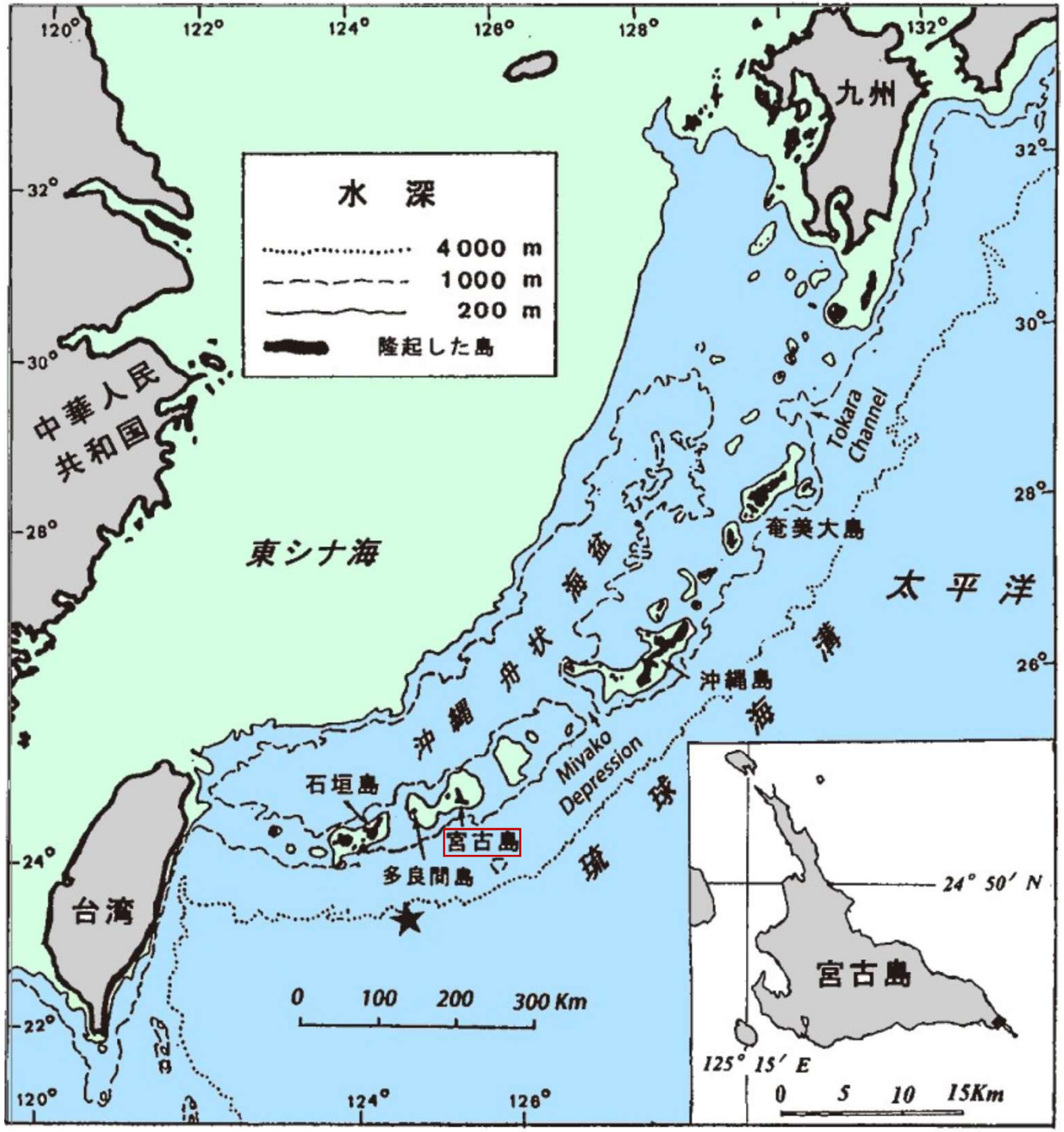
  - 丸木舟の性能が「板材の剥ぎ舟」より余程良かった？　丸木舟が作り易かったか？

- **技術の系譜を考える場合、世界最高峰の船形が、沖縄で熟成されたことは、偶然では無く、長期間、過酷な利用によって生み出されたものと推察する。それは、流れの速い黒潮を横切り、遡って航海することが多く、台風銀座の海域の中で、嵐に負けない・生き延びる舟を沖縄の祖先が、手痛い経験の中から、強い必要性の中から、作りだしたものと、畏敬の念をもって考えます。**
  - 黒潮を越え、日本本土や中国本土との往復が、

    高性能で保針性の高いサバニの船形を生み出したと考える。

    - この丸木舟のサバニを刳り貫くために開発された石器が、丸ノミ型石斧と考える。

琉球諸島の最も広い時期



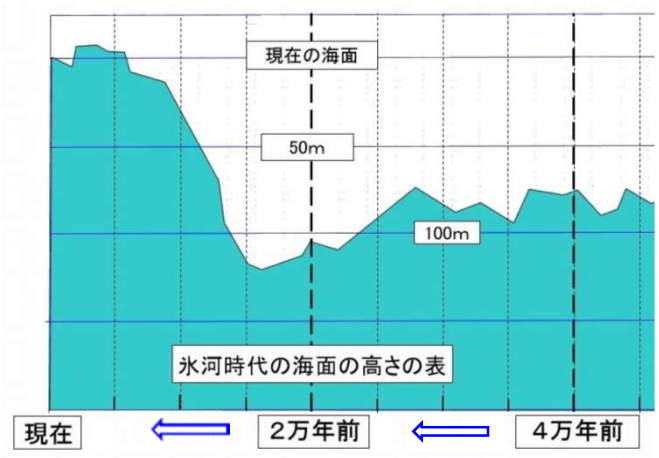
地学雑誌　小元久仁夫著
「沖縄県宮古島南東部、マイバーバマに打ち上げられた津波石の分布とハマサンゴ化石の較正年代」の図より（着色：丸地）

- 水深200mのラインまでは、海面低下は起こらなかったが、130-140mまで低下した時期がある。
- その時期の前後は、沖縄諸島は、大きな、平野を持つ島々の集合であった。
- 寒冷期とは言え、南方の黒潮の恩恵を受ける沖縄諸島は、温暖で、漁業資源に恵まれ、陸上も、森林など生活資源に恵まれた地域であったと考えられる。
- 但し、南沖縄＝先島諸島には、度々、巨大な津波の襲撃を受け、被害を蒙った。

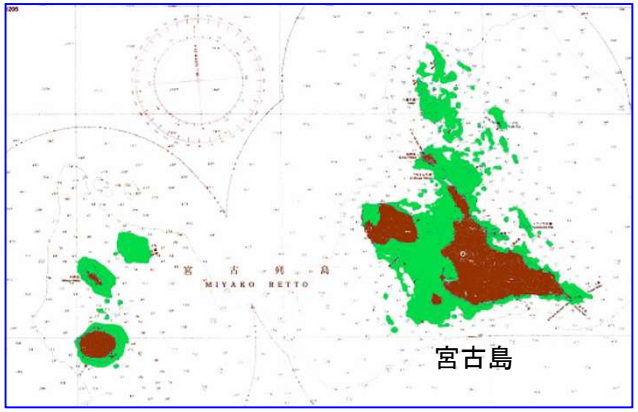
➢ 生活の痕跡は、海面下にあり、人の目に触れたり、発掘されることは無い。

縄文海進以前は住み易かった沖縄 （歴史を考える上の前提）

- 4万年前から沖縄諸島の面積はどう変わったのか？
  - 氷河期・海面高さは、80m以下時代が続いた。
  - 宮古島の場合、30m低下した場合、凡そ面積2倍
    80m低下した場合、凡そ面積4倍
- 凡そ4万年前は沖縄諸島は、島の面積は現在の数倍。
  - 平均気温は数度低かったが、黒潮に面したこと変わらず。
  - 縄文海進時（8000－6000年前）には、2-3m高くなり、
    陸地面積が減少し、生活環境が劣化した。

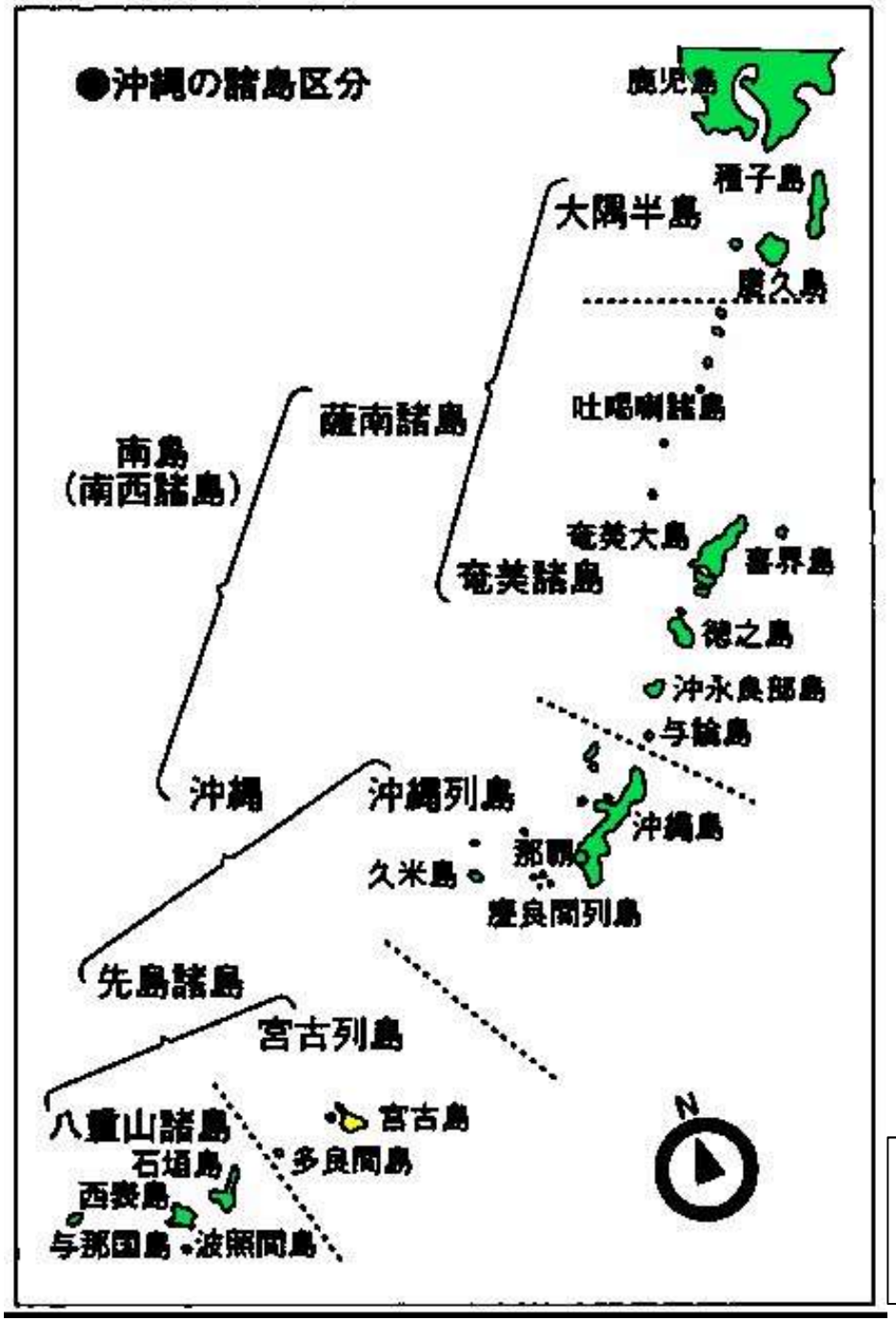


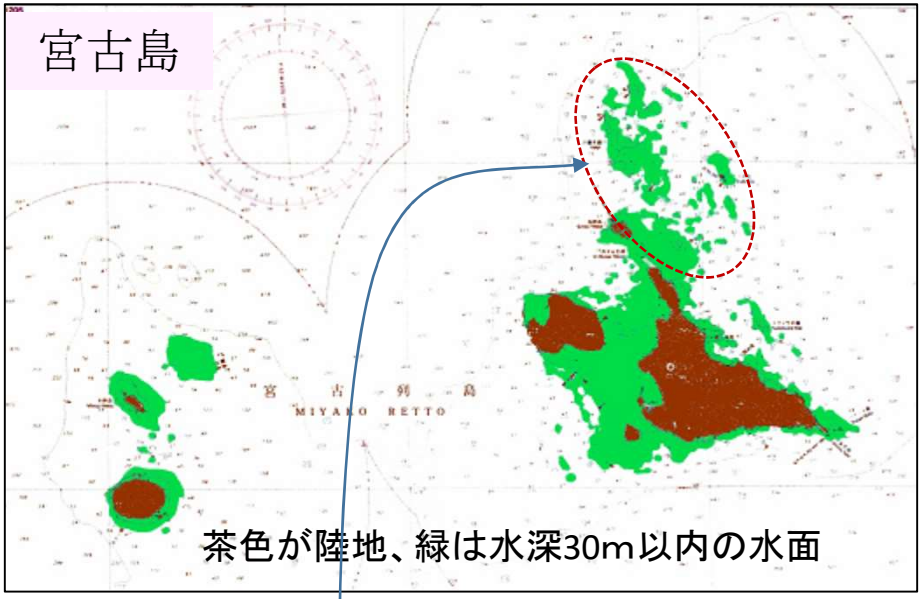
- 4万年前から8千年前までは、
  住み易い良好な生活・居住環境だった。



緑色は海面を30m低下した図、茶色は現状

緑色は海面を80m低下した図





宮古島付近の海図:緑色は水深30m以内。
伊良部島・下地島との間には広い浅瀬があり、
北方には、
大潮の時に島のようになる岩礁が広がる八重干瀬(やびじ)がある。

日本最古の人骨が続々と発掘

沖縄県出土の人類化石年代一覧

- ●下地原洞穴（久米島）
  15,000年前・乳児・カニの爪
- ●白保竿根田原（石垣島）
  15,000年前・成人一部・ｺﾗｰｹﾞﾝ
- ●港川フィッシャー（八重瀬町）
  18,000年前・成人4体・炭
- ●白保竿根田原（石垣島）
  19,000年前・成人一部・ｺﾗｰｹﾞﾝ
- ●白保竿根田原（石垣島）
  20,000年前・成人一部・ｺﾗｰｹﾞﾝ
- ●ピンザアブ洞穴（宮古島）
  26,000年前・成人一部・炭
- ●山下町第一洞穴（那覇市）
  32,000年前・幼児右脚・炭

琉新（夕刊）　2014年（平成26年）2月15日　土曜日　3版　2

沖縄で旧石器時代の貝器

国内初、多様な文化示す

日本最古の人骨が密集する沖縄地域のサキタリ洞遺跡（同県南城市）で、約2万年前の旧石器時代の貝製道具（貝器）が国内で初めて見つかった。県立博物館・美術館が15日、発表した。同時に人骨も出土し、骨と道具がそろった国内最古の例となる。骨はあるのに文化遺物が出ないといわれた沖縄旧石器時代の謎を氷解させ、人骨と道具の両面から日本人起源論に迫る成果だ。

出土したのはマルスダレガイ科やクジャクガイなどの貝の破片約40点。道具の証拠となる使用痕が確認できた。同じ地層から人間の歯と足の骨も見つかった。同じ層の木炭を測った放射性炭素年代をもとに計算すると2万～2万3千年前の値が出た。ツノガイの破片2点はビーズのように使ったとみられ、旧石器時代では国内初の貝製装飾品だという。

サキタリ洞遺跡の南1・5キロの八重瀬町からは、国内で唯一全身骨格がそろう「港川人」が見つかっている。今回の貝器の時期もほぼ同じで、当時の人類が身近な貝を利用して環境に適応した生活を営んでいた様子がうかがえる。

石灰岩質の沖縄地域は酸性土壌の本土に比べて骨の残りがよく、本土にほとんどない旧石器時代の人骨が複数確認されているが、使われたはずの道具が見つからないという不思議な状態が続いていた。

今回の発見はそれを埋める成果で、同博物館の山崎真治主任は「石器だけではない道具を使った旧石器時代文化の多様性を物語る」と話す。

サキタリ洞遺跡では同館による近年の調査で、8千年前の沖縄最古の土器や1万2千年以上前の人骨や石器が見つかっている。

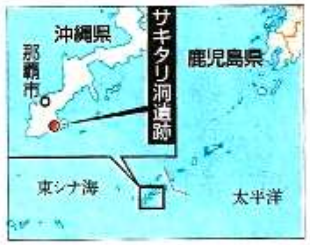
2万年前の貝製の道具。上のえぐりがある部分を刃にしたと思われる＝那覇市

近年のサキタリ洞遺跡の発掘成果

旧石器時代
- 約2万年前　今回見つかった貝器と人骨
- 1万2千年前　石器と人骨
- 8千年前　押引文土器

縄文時代

●港川人（近隣で出土）



日本人の起源探る手がかり

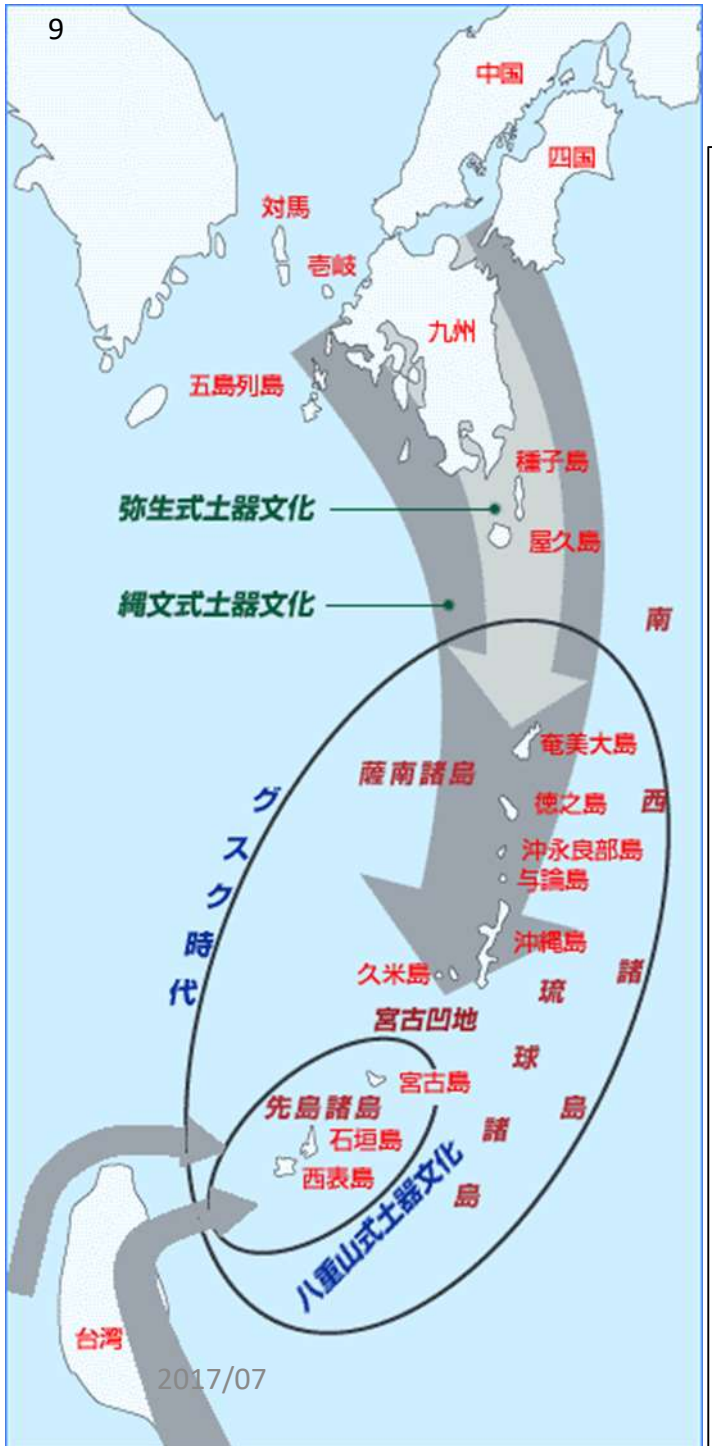
《解説》全国最古級の人骨がいくつもあるのに、なぜか道具がない。日本の人類学・考古学界を長年悩ませてきた沖縄旧石器時代の謎に、サキタリ洞遺跡の調査成果が答えを与えた。いかにも海に囲まれたこの地域らしい、貝器の登場という形で。

もし見つかるなら本土と同様、石器だろうと思われていた。が、予想を裏切る貝器の出土は、人類の生きる環境に応じて多様な素材を利用する適応力、文化のバリエーションの豊かさを鮮やかに示したといえる。

日本人の祖先の文化系統を解明する手がかりとして、貝器に期待する声は大きい。古くから貝を利用した南の島々の海洋文化の影響ととらえる向きもある。

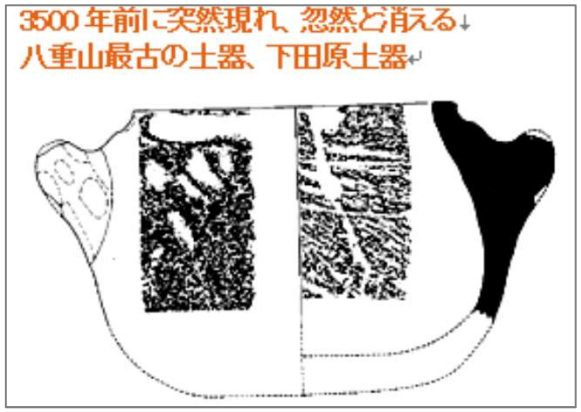
実際、人類学では、日本人の祖先は彫りの深い顔立ちなど南方的な骨格を持つとの考えが有力。旧石器時代人が南西諸島を伝わって北上し、本土にたどり着いて縄文人になったとみる説もある。それを証明する物的証拠は乏しいが、今回の発見が再考を促すきっかけになるかもしれない。

（編集委員・中村俊介）



現在有力な沖縄の歴史

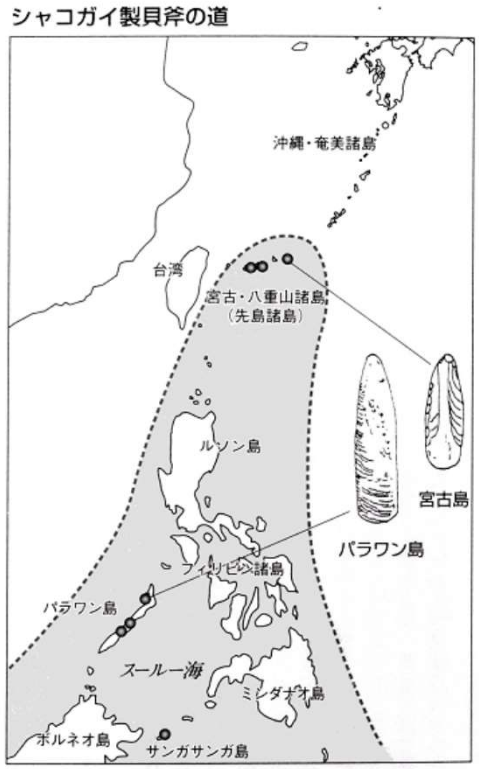
- ✓ 沖縄諸島には、約2万年前に台湾経由で、剥片石器を持った人々が移住してきた。
  - 奄美諸島で、2万年前の不定形の剥片石器が発掘された。
  - 不定形の剥片石器はこういう石器は、台湾のほか、香港や中国南部、ずっと南へ下がってオーストラリアで発掘。
- ✓ 沖縄の土器には縄文・弥生の影響を認める
  - ✓ 沖縄本島の伊波式土器は九州系統
- ✓ 八重山の下田原式土器文化は、縄文文化のものではない。
  - ✓ 貝斧を伴う。
  - ✓ 石斧文化
    - → 貝斧文化（下田原式土器）
    - → 石斧文化（無土器）



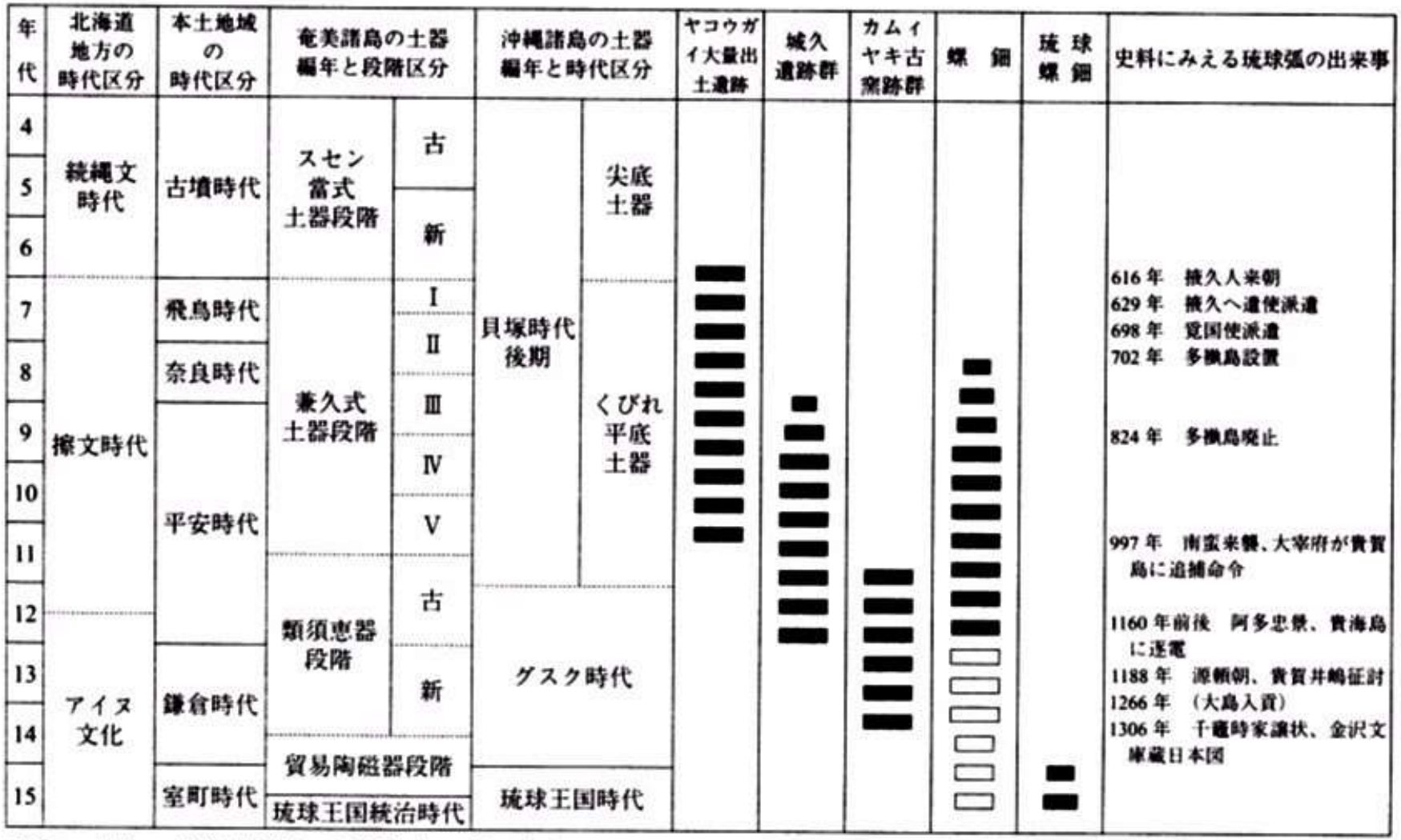
第１回やしの実大学報告書　1997年

高宮廣衛氏　講演

（沖縄国際大学と沖縄大学の学長を歴任）



北海道・本土と年代区分の対比と関連



表⑤　古代～中世並行期の奄美諸島・沖縄諸島における遺跡動態（高梨、2007 b）

森話社 「沖縄文化はどこから来たのか？」 高梨脩・阿部美菜子・中本謙・吉成直樹　共著より

地域ごとに異なる時代区分

- 琉球・沖縄では地域により、文化圏が異なり、文化圏ごとに、別々の時代区分がされている。
- 琉球諸島を4区分

表② 琉球弧の時代区分対比

55 土器動態から考える「日本文化の南漸」

森話社 「沖縄文化はどこから来たのか？」
高梨脩・阿部美菜子・中本謙・吉成直樹 共著より

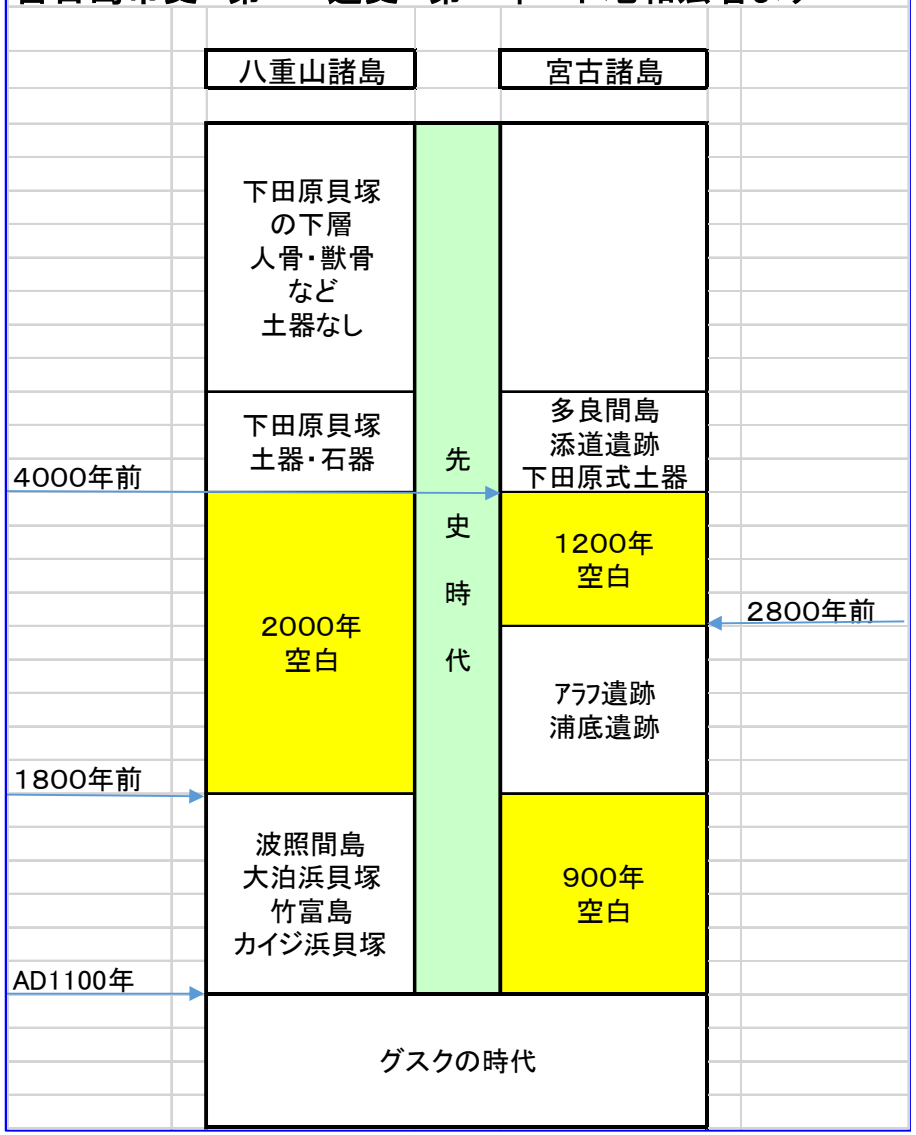
宮古島市史から

- 宮古島と琉球・沖縄の歴史を調べた
- 宮古島市史を見て文章で書かれたものを図に置きかえたものが右の図
- 平安時代末期の1100年頃のグスク時代に入るまでの長い期間が、先史時代と分類される。
  - この曖昧さ、大雑把さに驚く
- 又、先史時代には、北琉球（奄美・沖縄）と南琉球（宮古・八重山）の間には、交渉が無かったとの記述にも、驚きを感じた。

- 歴史学が「琉球・沖縄」に焦点を当てていないような感触を持った。
- 空白の期間が多く、解明が中々困難な予感。

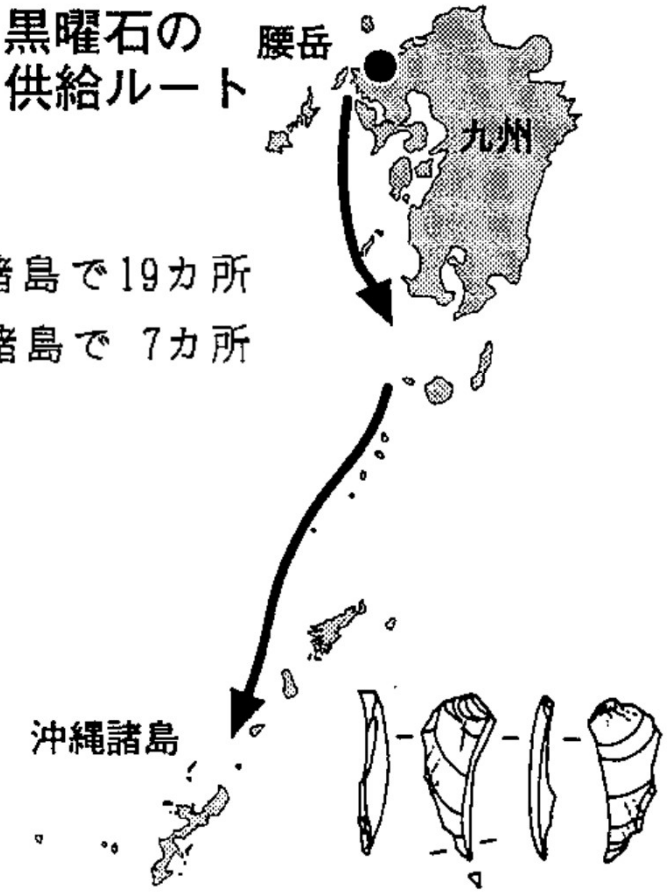
（グスクの時代：農耕社会に入り、グスク（城）を拠点とする集落に分かれ、お互いに抗争する時代）

宮古島市史　第一　通史　第一章　下地和宏著より



小田静夫著 「考古学から見た新・海上の道」より
日本第四紀学会 第四紀の自然と人間2001・08

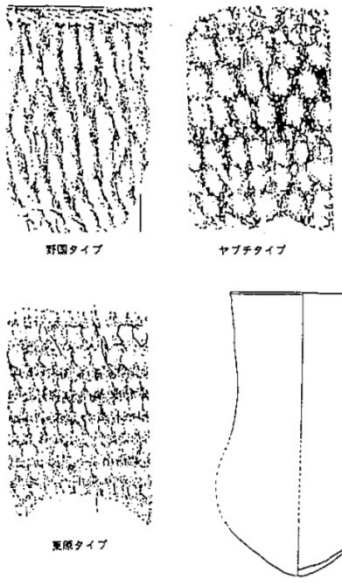
黒曜石の流通
（12,000～ 2,000年前）

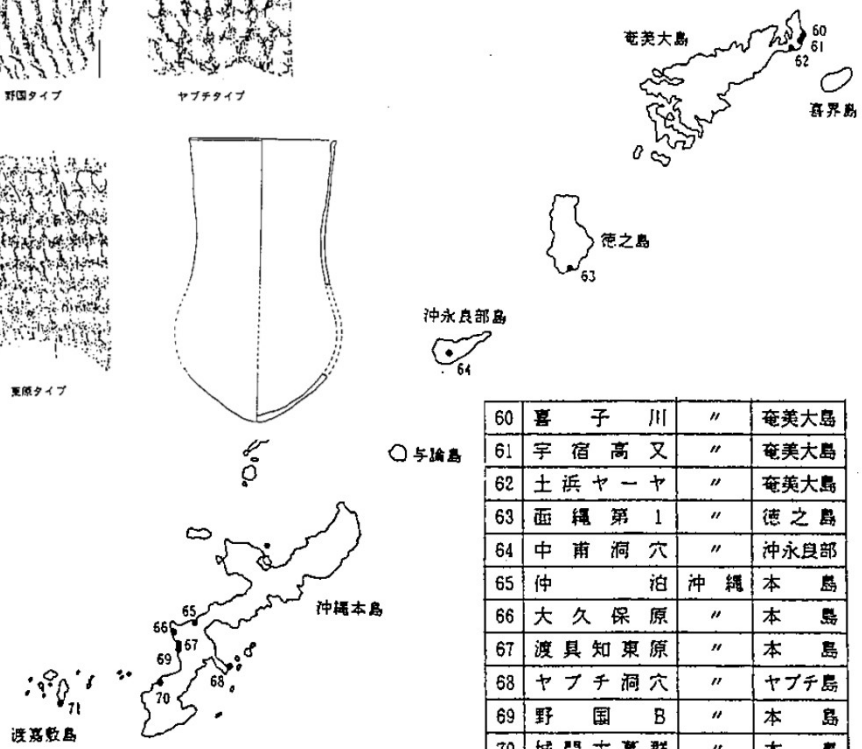


伊是名貝塚出土

南島爪形文土器文化
（7,000～ 6,500年前）

爪形文土器タイプ



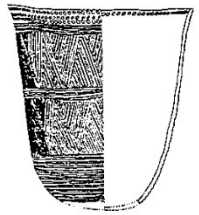


南島爪形文土器の出土遺跡

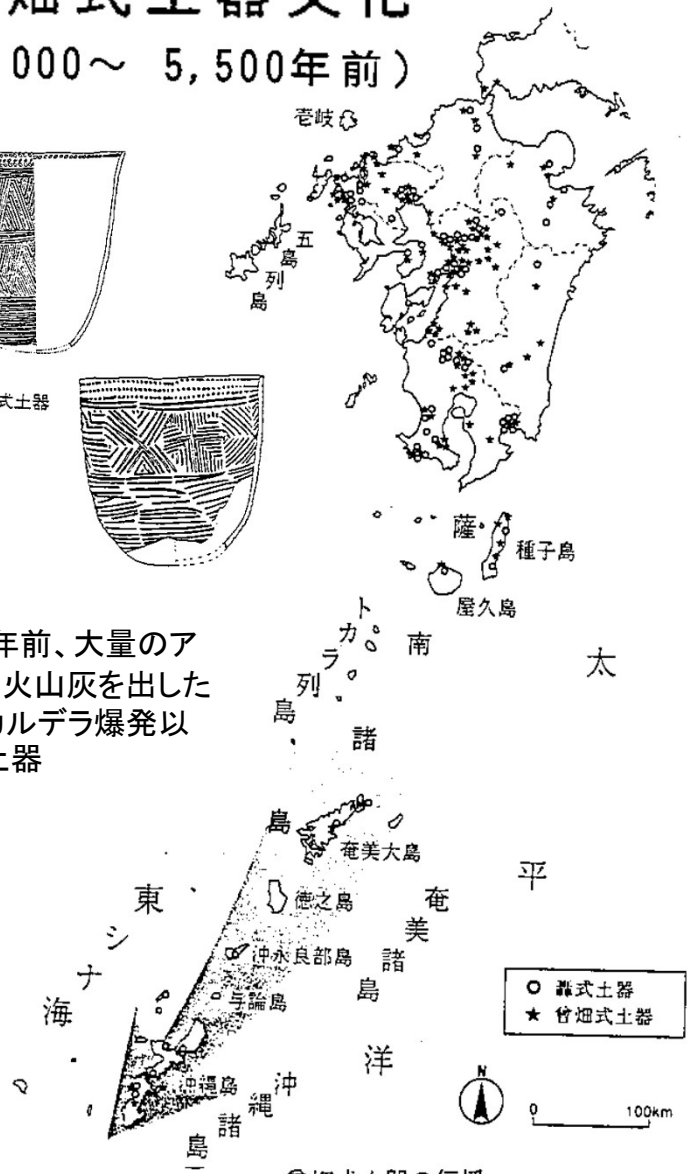
60	喜子川	〃	奄美大島
61	宇宿高又	〃	奄美大島
62	土浜ヤーヤ	〃	奄美大島
63	面縄第1	〃	徳之島
64	中甫洞穴	〃	沖永良部
65	仲泊	沖縄	本島
66	大久保原	〃	本島
67	渡具知東原	〃	本島
68	ヤブチ洞穴	〃	ヤブチ島
69	野国B	〃	本島
70	城間古墓群	〃	本島
71	船越原	〃	渡嘉敷島

小田静夫著 「考古学から見た新・海上の道」より
日本第四紀学会　第四紀の自然と人間2001・08

曽畑式土器文化
（6,000～ 5,500年前）



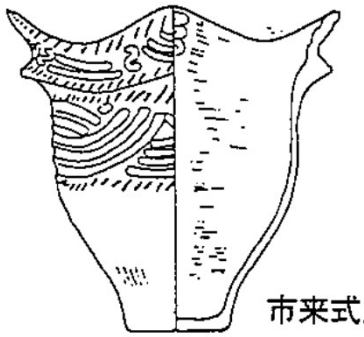
曽畑式土器



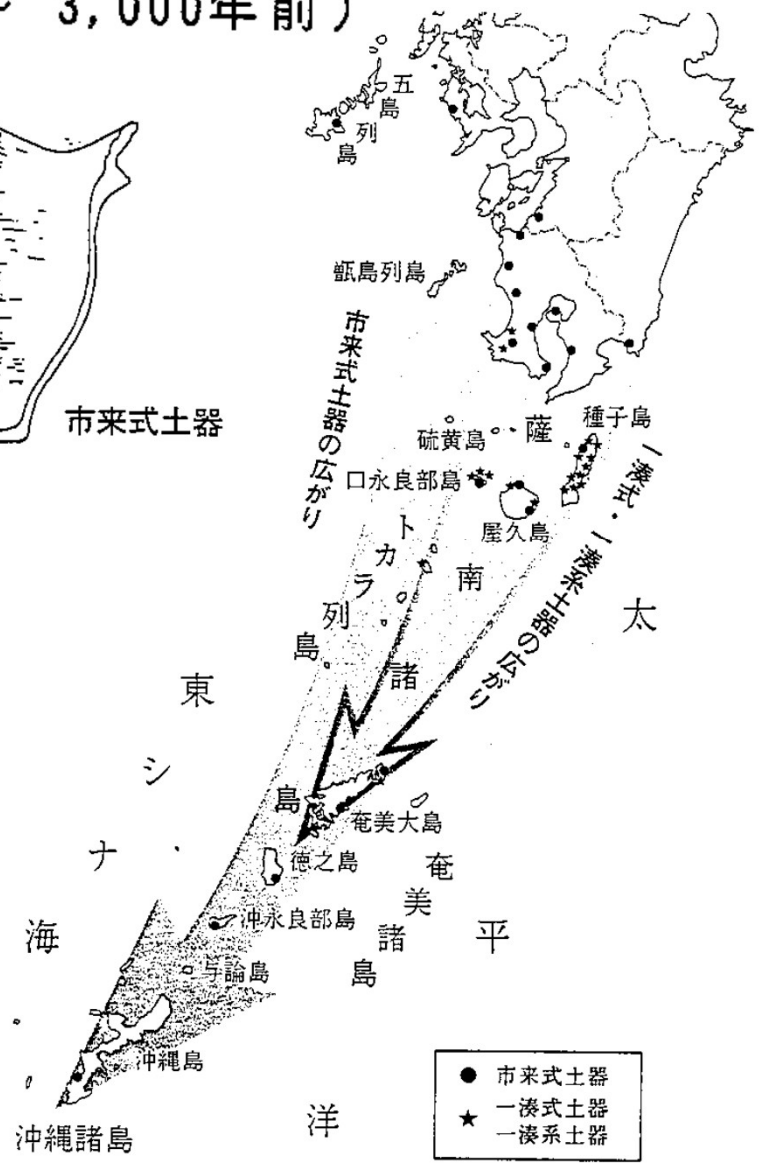
6,300年前、大量のアカホヤ火山灰を出した鬼界カルデラ爆発以降の土器

曽畑式土器の伝播

市来式土器文化
（3,500～ 3,000年前）

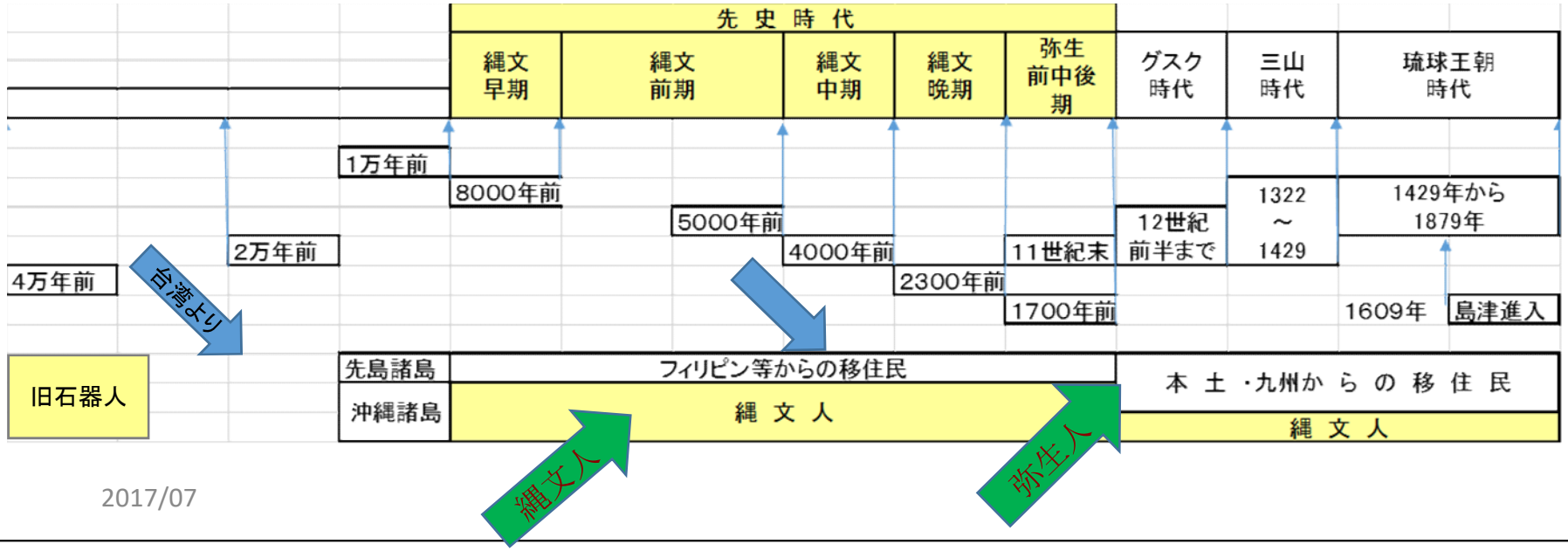


市来式土器



琉球・沖縄文化の流れ・暦年

- 約2万年前、台湾経由で、不定形の剥片石器を持ったヒトが流入した。
- 先史時代：3つの文化圏に分けて語られる
  - ①薩南諸島の北部、②奄美諸島・琉球列島の中部、そして③宮古・八重山諸島の南部
    - 北部：**本土の影響下にあった**
    - 中部：縄文文化が定着し、独自発展をとげた
    - 南部：**特殊で、フィリピン・インドネシアの影響を受け発展した**
  - グスク時代：　12世紀より　・　各地で、城（スク）を拠点として構え、集落単位で生活し、お互いに争った
  - 三山時代：　14世紀より　・　グスク拠点の集落が、沖縄本島の北山、中山、南山の三山に集約された
  - 琉球王朝：　15世紀より　・　中山が、南北を集約し、尚氏が統一し、琉球王朝を築いた
  - 島津進入：　17世紀より、薩摩の島津氏が侵攻し、管理下に置かれた。
- **本土に1000年遅れた11世紀まで縄文時代が続き、その後、農耕（弥生の特長）をやっと取り入れた。**



旧石器人は死に絶えた？

【写真：港川人1号（全身骨格）】

八重瀬町立具志頭歴史民俗資料館HPより

港川人1号レントゲン写真

- ハリス線　：湊川人の骨には、複数の飢餓を経験した痕が残っている。
  - このハリス線は、沖縄諸島では食料が欠乏する時期が発生し、人が行き続けることは困難だったことを示す。
  - 従って、彼らは、現在の沖縄人の祖先ではない可能性が高い。
    - 鹿児島大学・高宮広土教授

- 琉球大学大学院医学研究科の佐藤丈寛博士研究員外
  - 現代琉球人のゲノムデータの解析から、琉球列島の諸島間の分岐年代を調べると、それほど古くはならず、せいぜい数千年前になることが分かった（Sato et al. 2014）。
  - このことから、港川人を含め、琉球列島の更新世人類は、現代琉球人の直接の祖先ではない可能性が大きい。

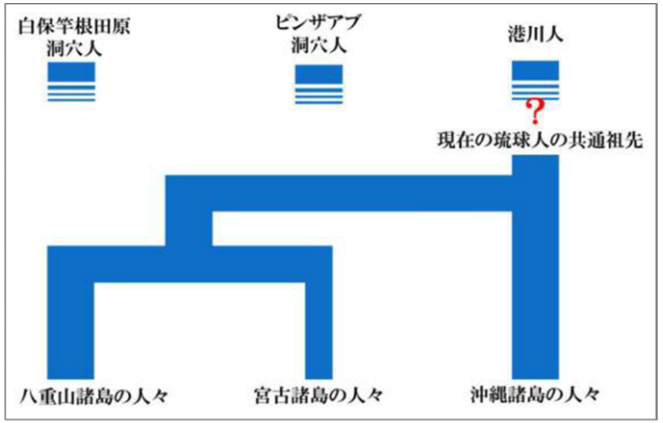
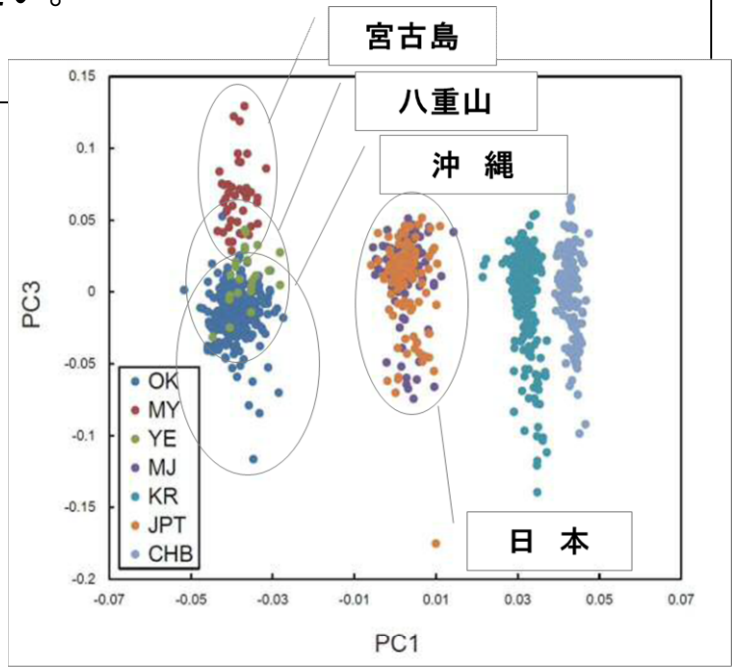


図3. 本研究結果と考古学的知見等をもとに推測した琉球列島の人々の成り立ち。



?

港川人のハリス線（飢餓線）

- **ハリス線** ： 人間はストレスがかかると体の中に変化が表れ、歯や骨にその痕跡が出ます。
  - ハリス線は、エックス線で横線として表れる。 栄養状態が極端に悪化し、その後改善すると、形成される。
  - 現在の日本人にも「飢餓線」が見られ事がある。一番多いのが、戦争体験世代のそれである。
- **西南日本出土の縄文時代から現代に至る人骨683体について，ハリス線の出現状況を調査した。**
  - 「西南日本古代人のストレスマーカー:1. ハリス線について」 古賀 英也（九州大学医学部 ）
  - 時代変化については，縄文人骨でのハリス線出現率は30.8%であったが，弥生時代以降は，時代，地域により多少の高低はあるものの，ほぼ50%の高い出現率を示し，経年代的低下傾向は認められなかった。
- 昭和22（1947）年、神奈川県横須賀市小川町の平坂西貝塚からは9千年前の縄文早期の人骨が一体発見された。
  - 平坂人は身長163cm以上の壮年男性で、骨をX線写真でみると、横に走る線が現れている。「飢餓線（ハリス線）」だ。 縄文早期の三浦半島はその環境は、むしろ恵まれていた方といえる。それでも、11本の「飢餓線」がある。
  - 平坂人は、9千5百年前のものといわれる夏島貝塚の「夏島式土器」と同じ土器を携えていた。
    - http://rarememory.justhpbs.jp/jyoumon/j.htm

リゾートイン　レア・メモリーのHP（良くできている）

港川人（1万8000年前）の旧石器時代）の脛（スネ）のレントゲン写真。

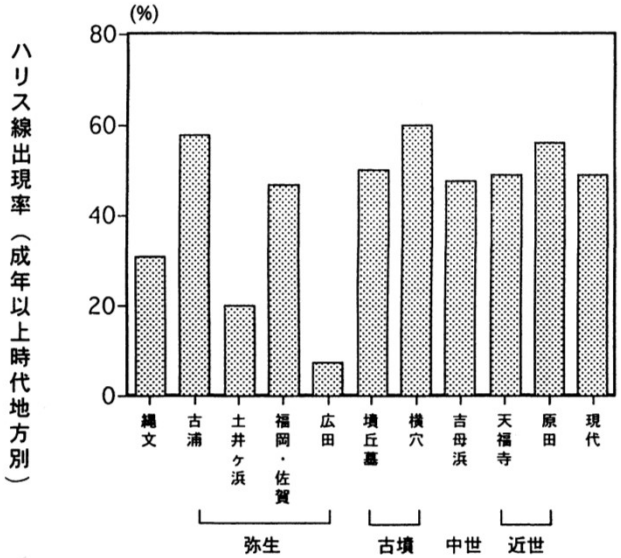


図3　時代・地域別で見たハリス線出現率（成年以上での比較）

- **港川人にハリス線があり、飢餓に遭遇していたとビックリし、絶滅の危機にあったとの懸念した。**
- **現代人にも、縄文人に30%もあったことが判り、大げさにとり過ぎたのでは、と思い直します。**

沖縄列島の人類遺跡の断絶時期
1万3千～1万1千年前と8～5千年前　について

- 「ヒトはいつどのように琉球列島に定着したのか？：琉球縄文文化の断続問題」
  - 伊藤慎二著　月刊考古学ジャーナル　No597　2010　3月号
  - 高宮広士（鹿児島大学）によると、（中略）、狩猟採集民と仮定した上で、住民が途絶えた後に、新移住民が入れ替わりやってきた可能性があるという。
  - 沖縄・奄美大島では、約7000年前に最古の土器群が現れる。九州以北に比べて土器出現が遅いのみでなく、同時期の九州以北の縄文文化との直接類似点の見あたらない土器群でもある。
  - 琉球縄文時代前Ⅰ期～前Ⅴ期（ca7000-2500　B.P.）の土器の新たな編年案を最近提示した。
    - その結果前Ⅰ期～前Ⅴ期に7つの土器様式が存在し、それらの土器様式を細かく区別すると全体で少なくとも28段階に分かれでほぼ連続的に変遷する様相を確認した。
    - つまり、土器の変遷過程からは、 琉球縄文時代前Ⅰ期～前Ⅴ期までの間に、 伝統の不連続（断絶）や土器製作者の完全な入れ替わりを示唆する証拠は　　確認できない。
- サキタリ洞穴では　　（サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告書Ⅰ）　2012年～2016年
  - 押引文土器1 個体分の破片がまとまって検出され、放射性炭素年代測定の結果、約8900 年前（8000 14C BP）のものであることが明らかになった。
- 港川フィッシャー遺跡　（小田静夫「港川フィッシャー遺跡について」『南島考古』No.28（2009.5）pp.1-17　　より）
  - 上層部から沖縄貝塚時代前期（縄文時代相当）のほぼ完形の「土器」と、その傍からイモガイ（クロフモドキ）1点が発見され「遺構」と考えられている。 この土器は、口径22.1cm、器高は39.7cmの大型深鉢形土器である。
  - この土器の傍から出土したイモガイの貝殻が8,640±90(TKa-12090)、同じ崖上の土器包含層の腐植土壌が8,550±290(TKa-12364)と測定
    - 上野原遺跡（約7,500年前）の深鉢形土器に類似形状（丸地コメント）
- 8～5千年前の断絶期間は、上記の土器編年、サキタリ洞穴遺跡、港川フィッシャー遺跡の結果から住民が途絶えたとの事実は否定される。

本州島・九州島編年・年代			大隅諸島 種子島	屋久島	黒島	口永良部島	トカラ列島 口之島	中之島	諏訪瀬島	宝島	奄美諸島 喜界島	奄美大島	徳之島	沖永良部島	与論島	沖縄諸島 伊平屋島	伊是名島	伊江島	沖縄本島	慶良間島	久米島	宮古諸島 宮古島	伊良部島	多良間島	八重山諸島 石垣島	西表島	波照間島	与那国島	沖縄編年 北琉球	南琉球		地質区分
33,000	旧石器時代	I	○										○						○			○								旧石器時代	旧石器時代		更新世
20,000		II										○						○	○		○												
												○																					
14,000		II	○																○														
10,000	縄文時代	草創	○																○														完新世
7,000		早	○									○	○	○					○	○									貝塚時代前期	I			
4,500		前	○	○						○		○	○	○		○	○	○	○	○										II			
3,000		中	○									○	○	○		○	○	○	○											III			
2,000		後	○	○	○	○		○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○			IV	新石器時代	前期	
1,000		晩	○	○				○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○									V			
300	弥生時代	前	○	○	○	○		○	○	○		○			○	○			○	○									貝塚時代後期	I			
B.C. 0 A.D.		中	○							○		○	○	○			○	○	○	○										II		後期	
		後	○	○							○	○	○	○		○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		III			
300	古墳		○	○								○	○		○	○	○	○	○	○	○									IV			
710	奈良		○	○																													
794	平安		○	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			グスク時代		スク時代		
1,192	中世		○	○	○	○	○	○	○	○																							
1,603	近世		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	古琉球				
											○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1908 近世琉球				
1,868	近代		○	○	○	○	○	○	○	○																			1970				
	現代		○	○	○	○	○	○	○	○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	近代沖縄 現代沖縄				

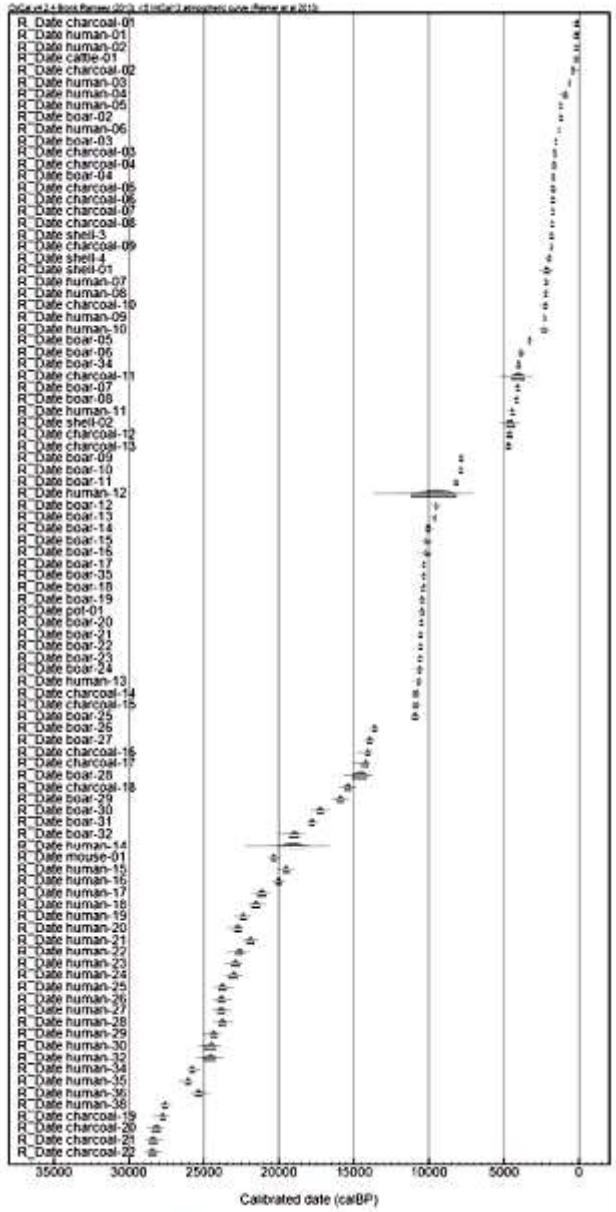
琉球列島各島嶼の考古学遺跡（1 （2）

旧石器人の人骨

		推定年代	化石骨の発見部	発掘年　・　場所
1	山下町第1洞穴	3万2000年前	幼児の大たい骨・けい骨など数個	1962年　那覇市（沖縄本島）
2	白保竿根田原洞穴	２万７千年前	全身骨格　など　１９体分以上	2007年　石垣市（石垣島）
3	ピンザアブ洞穴	2万6000年前	頭蓋骨の破片	1979年　上野村（宮古島）
4	伊江ゴヘズ洞穴	2万年前	アゴの骨・頭蓋骨の破片	1977年　伊江村（伊江島）
5	大山洞穴	1万8000年前	成人の下アゴ	1966年　宜野湾市（沖縄本島）
6	港川フィッシャー	1万7000年前	ほぼ完全な人骨4体～7体	1967年　具志頭村（沖縄本島）
7	下地原洞穴	1万5000年前	乳幼児の大たい骨・下アゴなど	1983年　具志川村（久米島）

- 白保竿根田原（しらほさおねたばる）洞穴の人骨は、
  - 2.7万年前から1.3万年前までの長期間
- 3.2万年前の沖縄本島の人骨、2.7万年～1.3万年までの石垣島の人骨、沖縄本島の1.8万年、1.7万年の人骨。これらから、沖縄列島には、ヒトが住み続けたことが判る。
- 日本には、極めて稀にしか残らない人骨で、沖縄の旧石器人が、連綿と生存したことが、証明される。

沖縄列島の人類遺跡の連続と断絶の時期



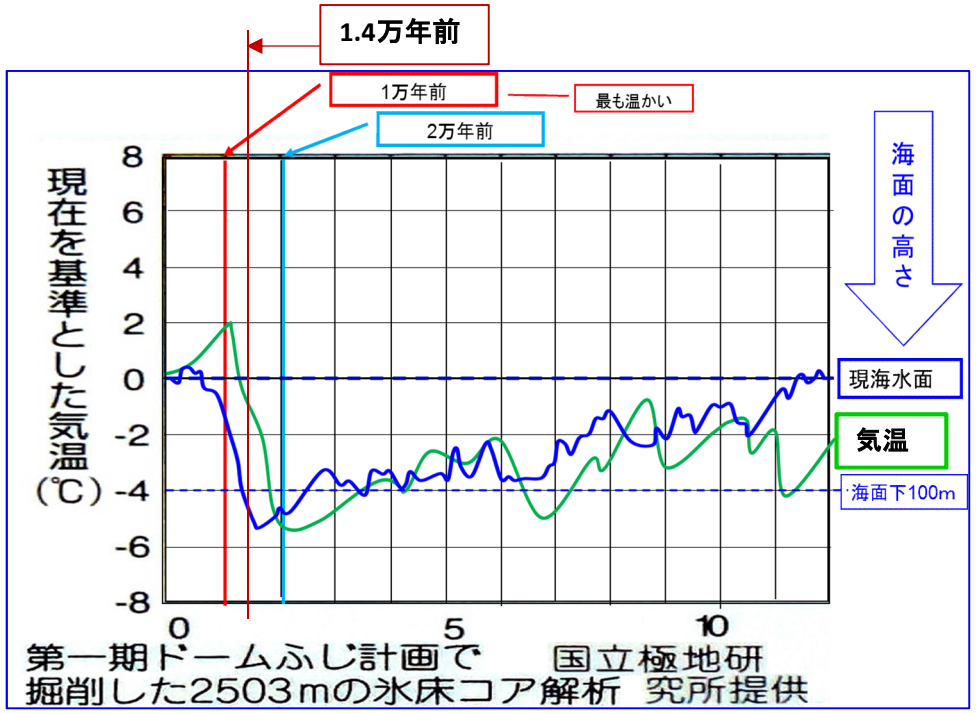
第50図　白保竿根田原洞穴遺跡において測定された較正放射性炭素年代の分布

- 白保竿根田原洞穴遺跡（石垣島：先島諸島）に関して、断絶した時代が報告されている。
  - 佐藤宏之（東大）の記事「白保竿根田原洞穴遺跡の考古学的成果」では、1.3～1.1万年前と8～5千年前の2つの期間で遺跡資料に断絶があるとしている。（較正年代）
  - 沖縄県立埋蔵文化センター調査報告書　第85集では、
    - 左記の表を示し、7,000～8,000年前にデータの欠損が見られるとしている。
    - 28,000 年前から13,000 年前までの15,000年間については43 点の確率分布が連続して存在しているように見えるので、島嶼環境で連続的に（安定的に）ヒトが生存できたと想像したくなるが、年代データは平均350 年に1 つしか存在せず、遺跡利用の連続・断続については容易に結論を出せない
- 石垣島のある先島諸島の津波
  - 宮古島の津波石が先島諸島の津波被害の大きさを象徴している。
  - 津波被害は先島諸島に集中し、沖縄本島では少ないことが判明した。
  - 現在、解明されている被害は、2千年前、など数千年レベル。
  - この断絶の時期は、津波被害を示したものか？
- 沖縄本島・奄美大島
  - サキタリ洞穴の調査では、11,200～2800年前のFS層は重機で剥ぎ取られ、調査対象から除外され、残念。綿密な解析を行えば、問題解消するのに。
- イノシシの遺跡
  - 野国貝塚軍（約7200-4400年前）では、多数のイノシシの骨を出土。
  - 新城下原第二遺跡でも、6413～6,022年前のイノシシの骨を出土
  - 古我地原貝塚/前原遺跡など沖縄本島とその付近でも、それ以降のイノシシの骨を多数出土
- 1.3～1.1万前年と8～5千年前の2つ断絶期間につき、上記以外の反証を捜すこととする。

沖縄列島の人類遺跡の断絶時期
1.3～1.1万前年の期間について

- 14,000～11,000年前の沖縄列島は

  生存に適していたか？　絶滅の時期か？
  - 1万4千年前は、気温が上昇し、
    現代よりも1℃低い程度で温暖化中、
    海水面は120m程低い。
  - 沖縄の島々は、面積が最も広い（現在の数倍）時期で、温暖化の時期。
  - 1万1千年前は、更に温暖化、
    海水面は70m程、島の面積はまだ広い。
  - 最も生存に適した時期



- 丸ノミ型石斧に関して
  - 沖縄本島・奄美大島で出土する石斧は、原位置（製作・使用された場所）で出土されたものでないため、正確な年代測定ができていない。
  - 九州の北西部まで広がる栫ノ原文化圏の縄文草創期の遺跡では、出土層から正確な年代が測定されている。14,000～12,000年前　：　栫ノ原遺跡は、12,000年前の噴火の火山灰層の下から出土。12000年よりも、前であることを示している
  - 14,000～12,000年前の時期は、丸木舟が作られ、
    沖縄⇔九州間の交流が盛んだった時期。　上野原遺跡など、九州との交流があった時期
- この期間が、生存に有利な事実はあっても、不都合な事実は出てこない。

沖縄列島の住民に関する従来の知見

1. 最新の人類学的知見では、
   - 黒潮は約6万年前には、日本列島の南側にまで到達していたので、流路の島嶼群、つまり「道の島・琉球弧」を北上するルートを選択し、拡散して来た人々もあったろう（小田2005；海部2005）。

(^_^)

2. 「島」という環境は、
   - 一般的には面積も狭く、安定した食糧の獲得が困難な場所と考えられている。
   - これは移住してきた先史人集団にとって、新しい島環境は生活食糧の獲得、人口の維持など定住する条件を獲得するには大変な努力が必要であった（高宮2005）。

(*_*)

3. 貝塚時代前I期（早期前葉）約7,000～6,500年前の中琉球最古の新石器文化である。
   - この土器文化の出自系統は、現在**九州本土からの南下説**や**東南アジア、台湾島からの北上文化説**があるが、現在論争中である。
   - その後九州本土から縄文前期の「曾畑式土器」が沖縄本島にまで**南下**し（約6,500～4,500年前）
   - 九州本土から縄文後期の「市来式土器」が沖縄本島にまで**南下**している。（約3,200～2,700年前）
     - 以上：小田静夫著「琉球弧の考古学―西南諸島におけるヒト・モノの交流史―　より

(*_*)

4. 本土が弥生・古墳時代に入り、
   - 九州から弥生人が**南下**し、先住民を抑え、日本語が沖縄の言語となった。

(*_*)

- まとめ　：
  1. スンダ大陸から沖縄・日本列島に新人（ホモサピエンス）が到来した。
  2. 沖縄では、その新人達は、狭い島と云う生存の厳しい環境下で滅亡した。
  3. 九州の縄文人がその無人の沖縄列島に南下し、沖縄の先住民となった。
  4. 古墳時代以降に、本土日本人が沖縄に到来し、日本語が使われ、沖縄を支配した。

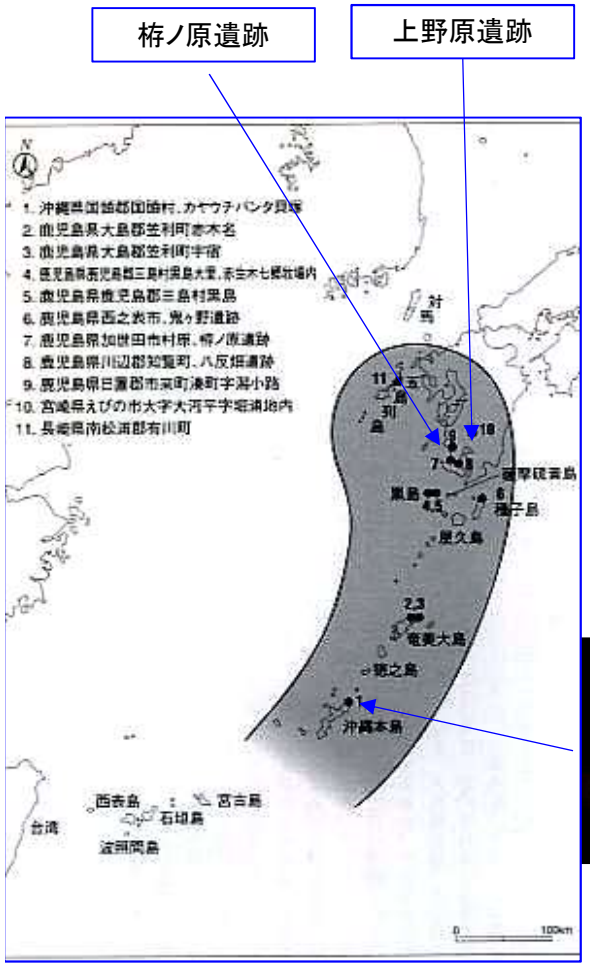
- **この従来の知見の２－４には賛成できない。 以下、その理由を述べ、新しい考え方を提起する。**

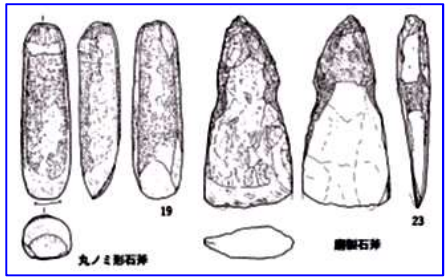
南下したはずの九州の縄文人　：　どんなヒト・文化

- **1.4万年前、南九州の栫ノ原**には、初めての定住型集落が存在した。
  - 発生期の土器である隆帯文土器
  - 配石炉，集石遺構，土坑8（内，煙道付炉穴1）などの遺構
  - 石鏃・石斧・磨石・石皿・削器などの石器も多量
- 1.1万年前に、櫻島サツマ火山灰に埋もれ滅亡した。
  - 煙道付炉穴は，薫製施設と考えられ、日本では、ユニークなもの。
    - 南方系の文化とも言われる。
  - 丸ノミ型石斧は、沖縄地方でも出土する
- **曽畑式土器**（そばたしきどき）は、熊本県宇土市の曽畑貝塚からはじめて出土した土器
  - しかしその作り手はおそらく北方系の櫛目文土器の担い手ではなく、
  - 轟B式土器の作り手である南方性海洋性民族（南島系海人族）が、櫛目文土器の造り手との接触により、影響を受けたものと考えられる。
  - 轟B式土器（とどろきBしきどき）とは九州地方を中心に中国地方西部、山陰地方、朝鮮半島南岸まで広がる約6000年前の土器である。
- **市来式土器**（鹿児島県）については、
  - その祖形とされる松山式土器が海を渡った屋久島・一湊遺跡から出土している。このこともまた、縄文期から南九州の海洋性を示していよう。
  - 南九州の海洋性とは、どうやら中国大陸との関係も想定される。

- 南下したはずの縄文人とその文化は、何故か南方文化の強い影響かにある。　南下が本当に起きたのか検討してみる

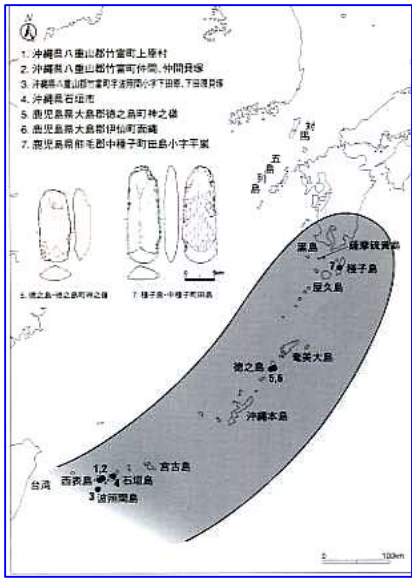
栫ノ原遺跡（14,000～12,000年前）・上野原遺跡（9,500～6,500年前）





もう一つの縄文文化　実は貝文文化
縄文草創期（14000～　）

- 食生活が変わり、土器を使用し、定住が始まった時代。東北の縄文と異なり、土器に貝の文様が入る。
- 横型の石斧と縦型丸ノミ型石斧が出土。
  - ✓ 大木を伐採し、丸木舟を建造した民族。
  - ✓ 沖縄本島から九州西南部へ広がる。
- 栫ノ原が火砕流に埋まった後は、丸ノミ型石斧は、太平洋沿岸の静岡方面まで拡大。



小田静夫氏の論文より借用

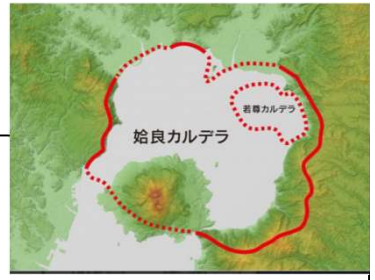
上野原遺跡　（9500～6500年前）

- 日本列島最古の集落跡。石蒸し料理施設の集石39基、燻製料理施設の連穴土抗（炉穴）19基、道跡（二筋）、多数の土抗や生活跡。
- 同じ遺物包含層から曽畑式土器・深浦式土器（前期），並木式土器（中期），指宿式土器・市来式土器（後期），上加世田式土器・入佐式土器・黒川式土器・刻目突帯文土器（晩期）等が混在して出土している。
- 時代が下がると、　　→　石斧は全面研磨の時代となる。　先島諸島から沖縄・九州に広がり、更に日本海沿岸を上り、秋田・青森まで出土する。

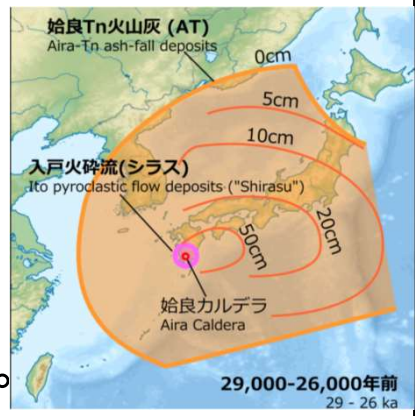
丸ノミ型石斧（栫ノ原形石斧）を開発したのは、誰？

- 凡そ4万年前から沖縄列島の先住民は、刃先磨製石斧を使い、大木を切り、丸木舟を作っていたと推測される。
  - 2万年前頃には、琉球イノシシの仔を乗せ、列島各島へ移動し、放ち、狩猟対象とした。
  - 沖縄本島の「サキタリ洞遺跡」の旧石器人は、「海産物」を多く利用していたことから、舟の活用が推測される。
- 1万4千年前頃の丸ノミ型石斧の開発時期には、刃先磨製石器を使い始めてから、2万6千年の年月が経過。より良い丸木舟製造の工夫と努力が、完全磨製石器で横型斧である丸ノミ型石斧を生み出したと推測する。
  - 何処か別の地域で開発され、流入したとするには、流入先の地域で、優れた石器技術の存在が必要。
    - 東南アジア・台湾・南中国での磨製石斧の出現は、約4,000年前が最古とのこと（小田静夫）。
    - 刃先磨製石斧は、オーストラリアのアボリジニーの使用があったが、ヴォレンドルフ遺跡出土の約2万5000年前の全面磨製石斧があるのみ。
  - 沖縄の周辺地域では、1万4千年前以前に磨製石斧すらないことから、外の地域で、全面磨製石斧の開発は不可能。
  - すなおに、沖縄・日本で、開発されたと考える
    - 島嶼間の交流が行われていた沖縄列島が、丸木舟の必要性が最も高く、実績もある。
    - 沖縄は、丸木舟で作られた、世界最高の船型を持つサバニを開発しており、やはり、沖縄がその開発地と考えられる。
      - 鹿児島県の栫ノ原遺跡に因んだ名称が丸ノミ型石斧には与えられているが、、、、
- ならば、何故、沖縄本島には、原位置に石器が遺された遺跡が、発見されないのか？　（沖縄本島の国頭村が、最初に発見された処。）
  - 当時の気候と海水面の位置を考える。
    - 2万年前が最も寒く、6000年の間に急激に温暖化した。
    - 1万4千年前は、海水面は100mほど下がっていた。（氷床が溶けるスピードは、気温上昇より、大幅に遅れた。）
  - 丸木舟を作っていた場所は、海岸線に近い場所。（現在では、海面下100mの、海中にある。）
  - 奄美大島で多く出土する丸ノミ型石斧は、海岸線が上がった時代まで、使い続けられた・又は作りなおされたものになる。
  - 原位置（現在は海面下100m）で、石斧が遺された遺跡が発見される可能性は薄い。
- 実務的に考えると、1万4千年前に、沖縄では、丸ノミ型石斧を開発し、丸木舟を作り、活発な海洋航海が行われていたと考えられる。

九州では、何が起きたのだろうか？



- 約 2 万 9,000 年前に、鹿児島湾の姶良カルデラが噴火。
  - 高温の火砕流が九州ほぼ全域を焼き尽くし、
  - 四国以西の旧石器人を死滅させたとも言われる。



- 栫ノ原遺跡は、14000年前から始まり、
  - 11,000年前に、櫻島サツマ火山灰に埋もれ滅亡した。
- 上野原遺跡も、9500年前から始まり、火山爆発の影響を受け続けた。
  - 鬼界カルデラの破局的噴火は、約 7,300 年前に生じた。
    - 鬼界カルデラ火山灰は、数メートルも降り積もって九州や四国の縄文人を死滅させた。
      - 南九州一帯の地層に、火山灰が、50-60cmの厚さで残り、「アカホヤ」と呼ばれる。

✓ **九州の縄文人は、火山爆発に由来する火砕流・火山灰により、滅亡。**

- 幸いに生存できた人々も、ダメージを受け、石斧を持ち、九州を逃れ、東海地方や日本海側に避難した。

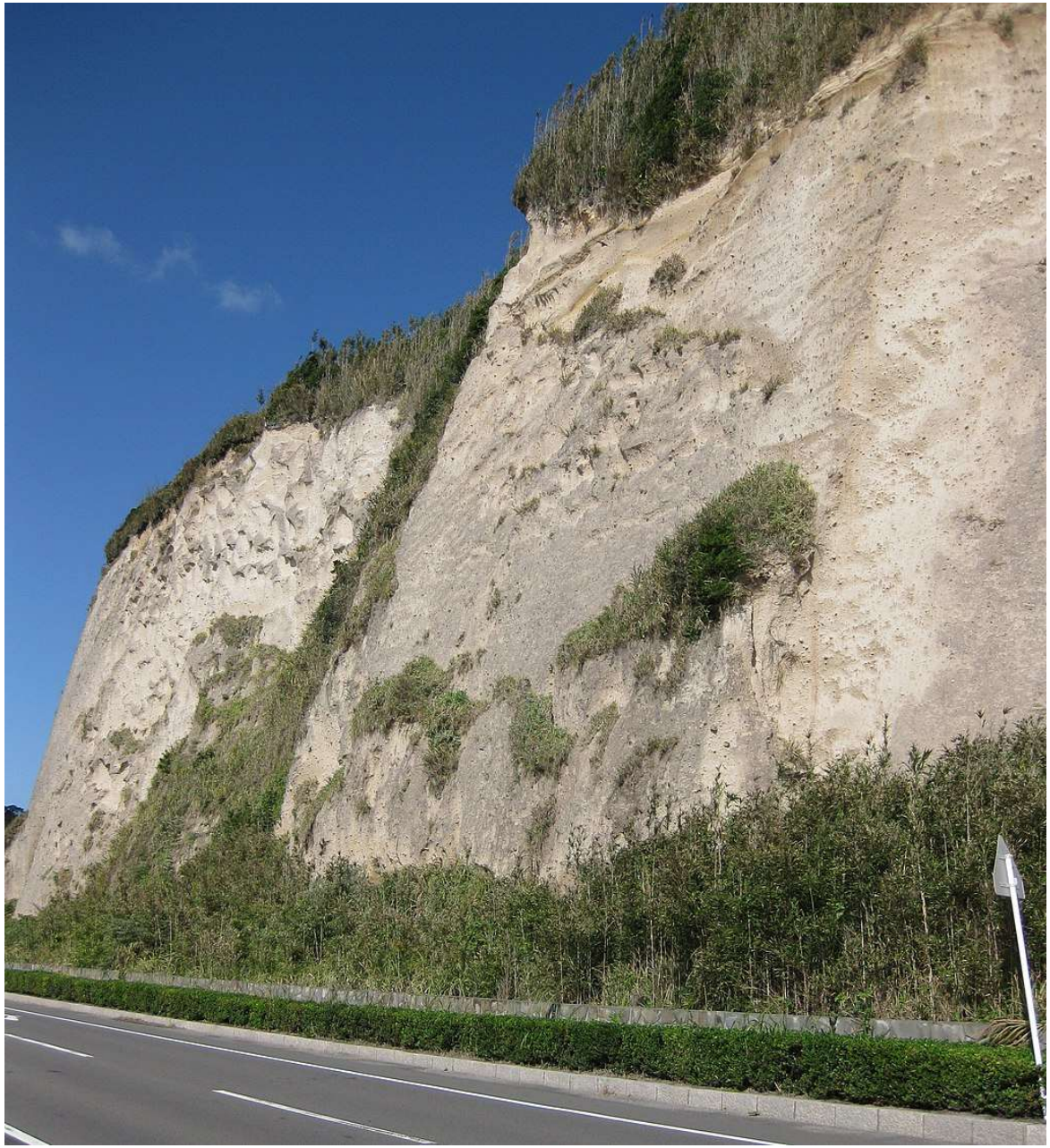
✓ **沖縄列島は、南九州の火山爆発の直接的影響は受けなかった。**

- 火山灰も、沖縄地方には、大きな影響を与えなかった。
- 沖縄は、丸木舟を持ち、南九州との交易・交流を行えた。

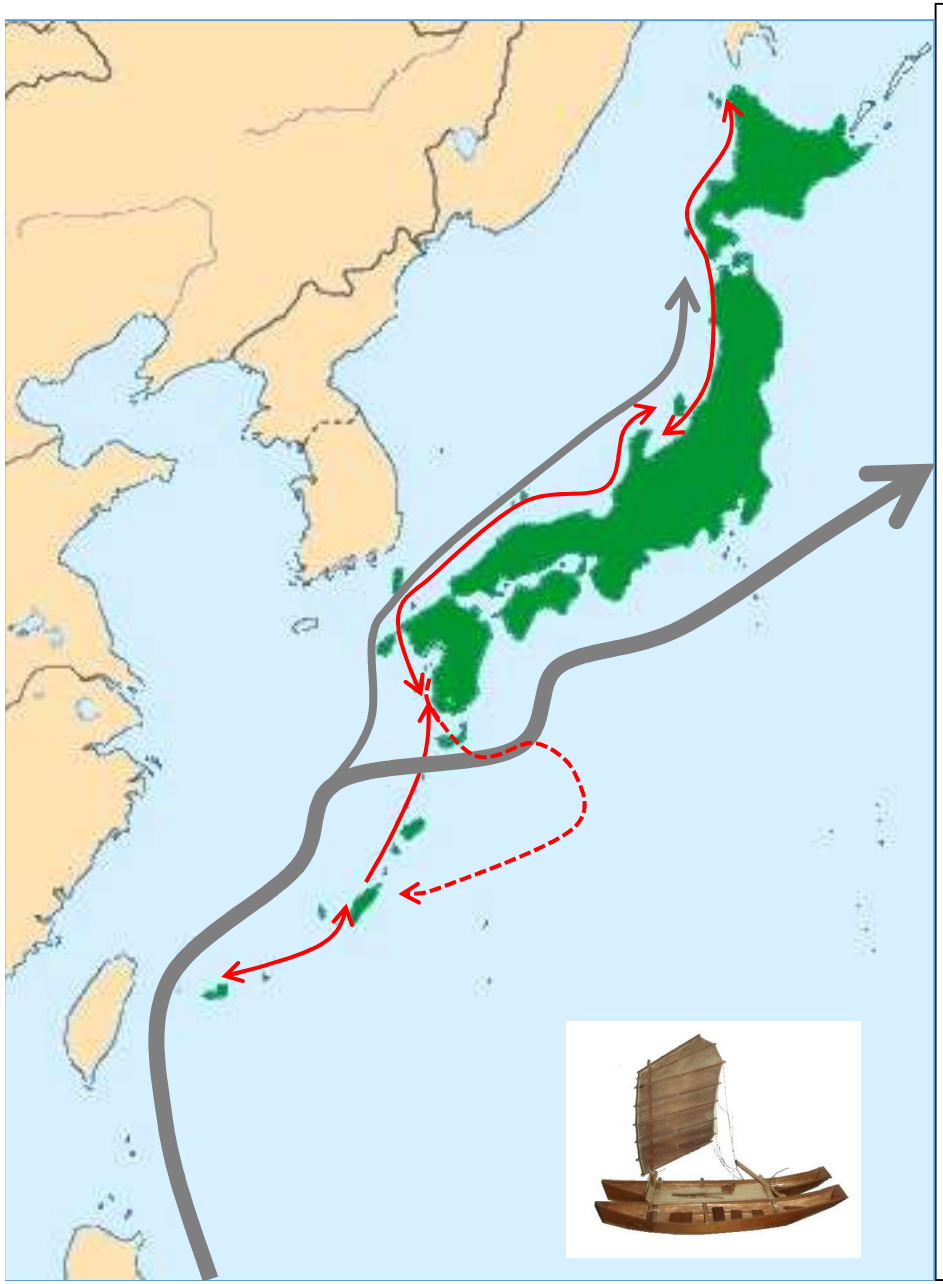
➢ 栫ノ原の新しい優れた文化を持ち込んだのは、南の（沖縄）の人々

✓ **南九州の優れた文化と交流があった沖縄は、この九州の状況にどう対応したのだろうか？**

姶良カルデラ噴火の生成物シラス台地



沖縄の海上交易・交流の範囲



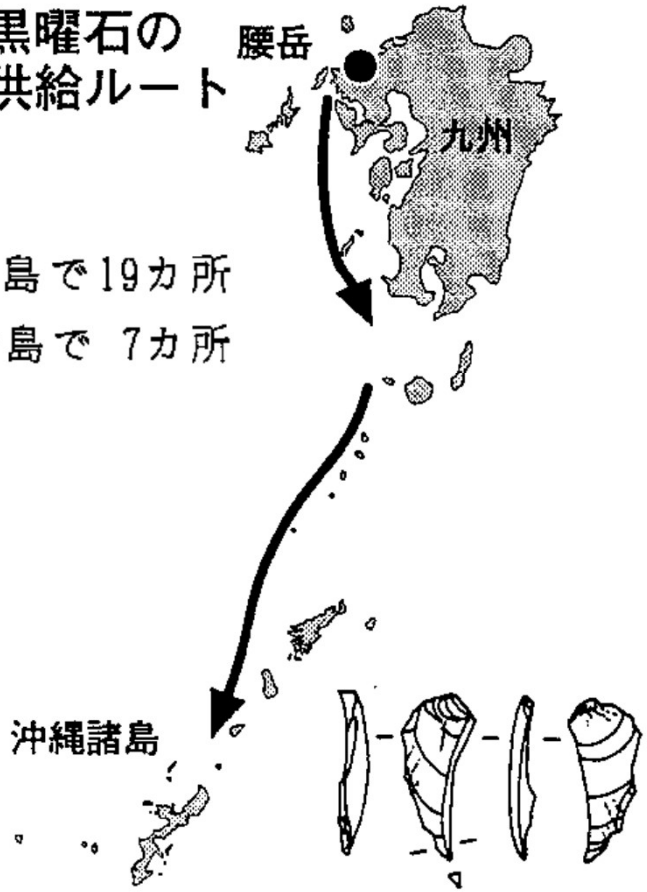
- 丸ノミ型石斧で丸木舟を建造。
- その丸木舟に使い航海
- 双胴にして帆を張り、荷物を載せ航行

- ２万年前：イノシシの仔を乗せ、
  列島各島へ　放牧・狩猟
- 1.4万年前：　鹿児島・栫ノ原遺跡へ
- 9.5千年前：　鹿児島・上野原遺跡へ
- 3.2～2.4千年前：　・宮崎・熊本・福岡・長崎へ
  - 「縄文後期黒色研磨土器」出土
- 沖縄⇔九州、九州⇔北陸、北陸⇔北海道
  - 3000年前の船泊遺跡の沖縄産貝類・北陸のヒスイは、この航路の存在を示す。
- 沖縄は、広域の交易・航行能力を持っていた。
  - 黒潮を、遡る航海も可能だった。
- 一方、九州の縄文人は、
  - 度重なる火山爆発の被害で、九州から黒潮・対馬海流に乗って、東海地方へ・東北四方へ移住した。
  - 黒潮を遡っての航行は、罹災した九州縄文人には、可能であったとは考えられない。

九州から沖縄へ持ち帰った文物　－1

小田静夫著「考古学から見た新・海上の道」より
日本第四紀学会　第四紀の自然と人間2001・08

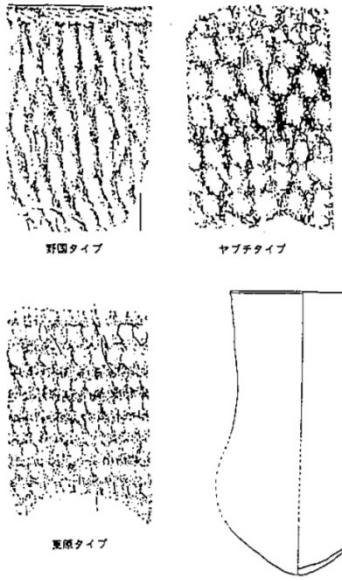
黒曜石の流通
（12,000～　2,000年前）

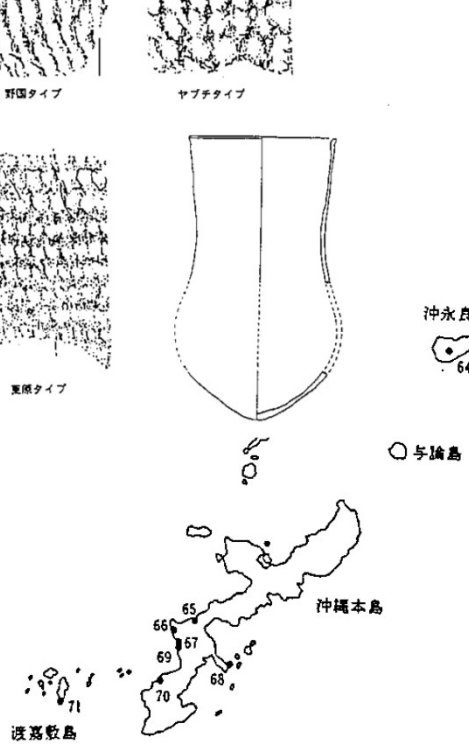


伊是名貝塚出土

南島爪形文土器文化
（7,000～　6,500年前）

爪形文土器タイプ





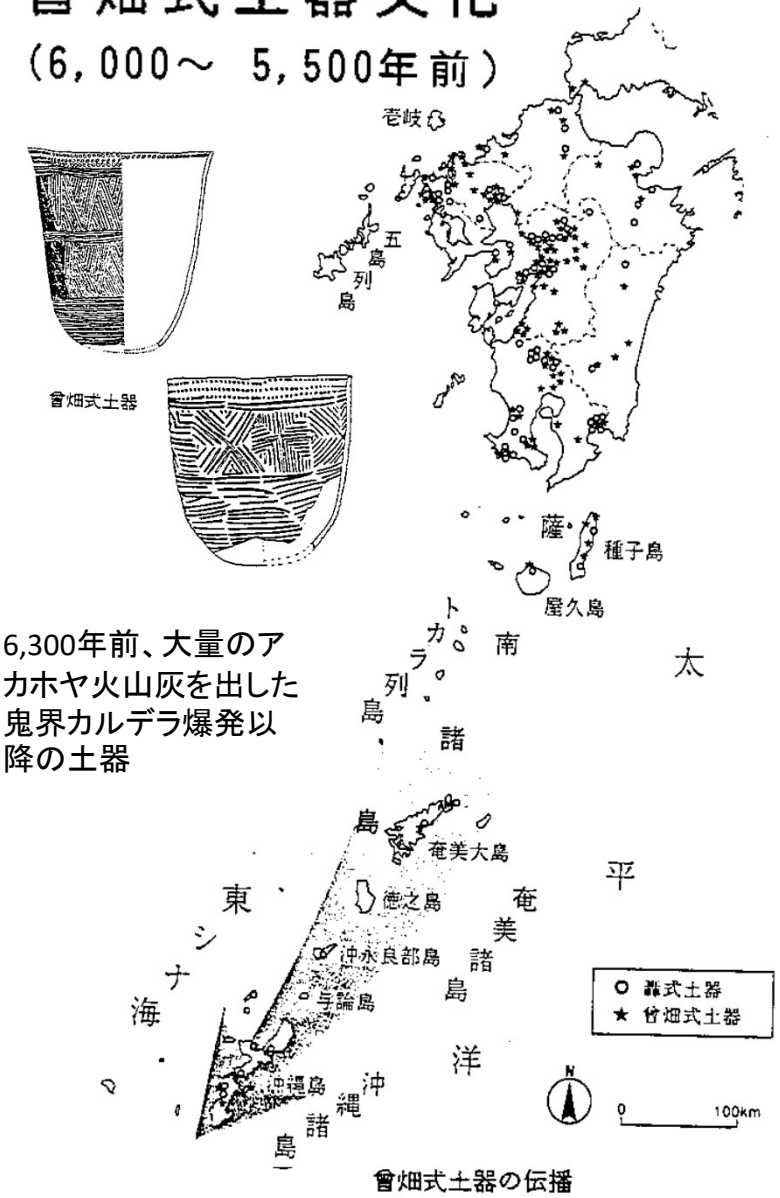
南島爪形文土器の出土遺跡

60	喜子川	〃	奄美大島
61	宇宿高又	〃	奄美大島
62	土浜ヤーヤ	〃	奄美大島
63	面縄第1	〃	徳之島
64	中甫洞穴	〃	沖永良部
65	仲泊	沖縄	本島
66	大久保原	〃	本島
67	渡具知東原	〃	本島
68	ヤブチ洞穴	〃	ヤブチ島
69	野国B	〃	本島
70	城間古墓群	〃	本島
71	船越原	〃	渡嘉敷島

九州から沖縄へ持ち帰った文物　－２

小田静夫著「考古学から見た新・海上の道」より
日本第四紀学会　第四紀の自然と人間2001・08

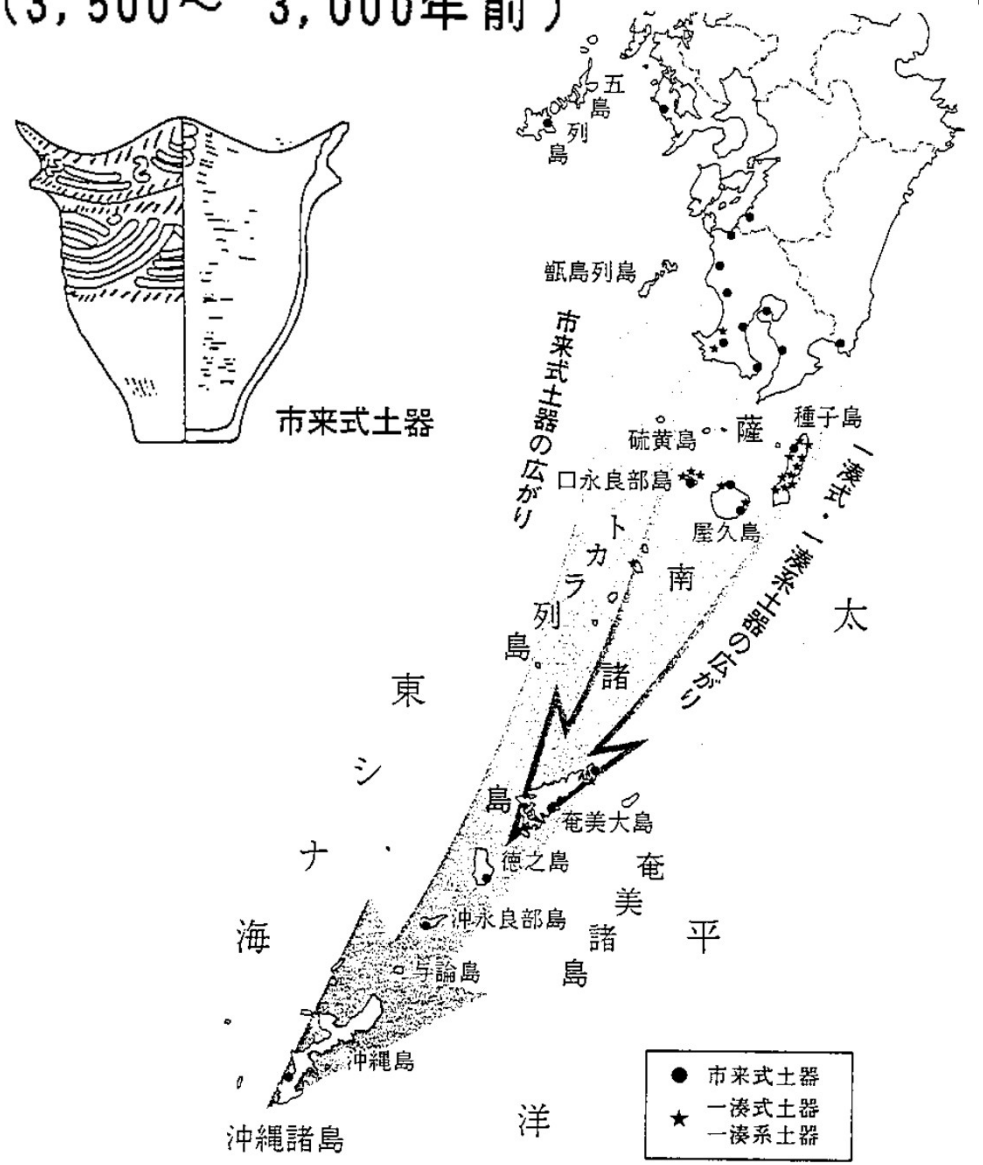
曽畑式土器文化
（6,000～ 5,500年前）



6,300年前、大量のアカホヤ火山灰を出した鬼界カルデラ爆発以降の土器

曽畑式土器の伝播

市来式土器文化
（3,500～ 3,000年前）

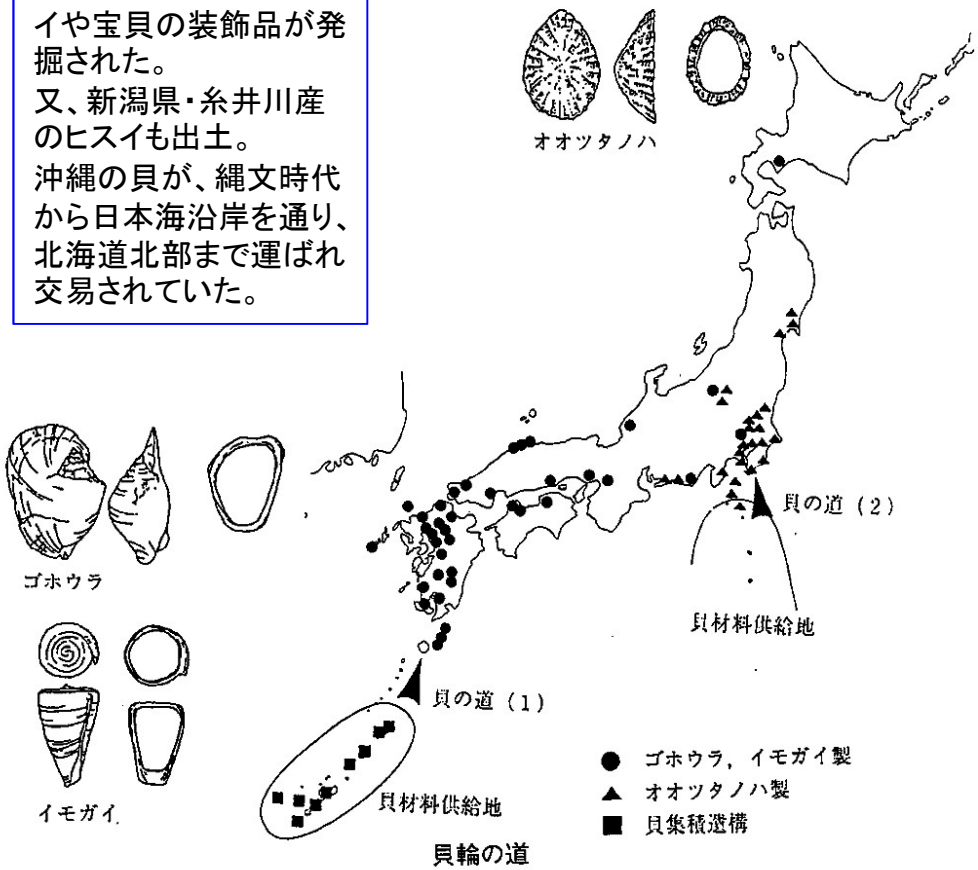


沖縄から九州・本土へもたらされた物

小田静夫著 「考古学から見た新・海上の道」より
日本第四紀学会 第四紀の自然と人間2001・08

貝の道
（2,000～ 1,500年前）

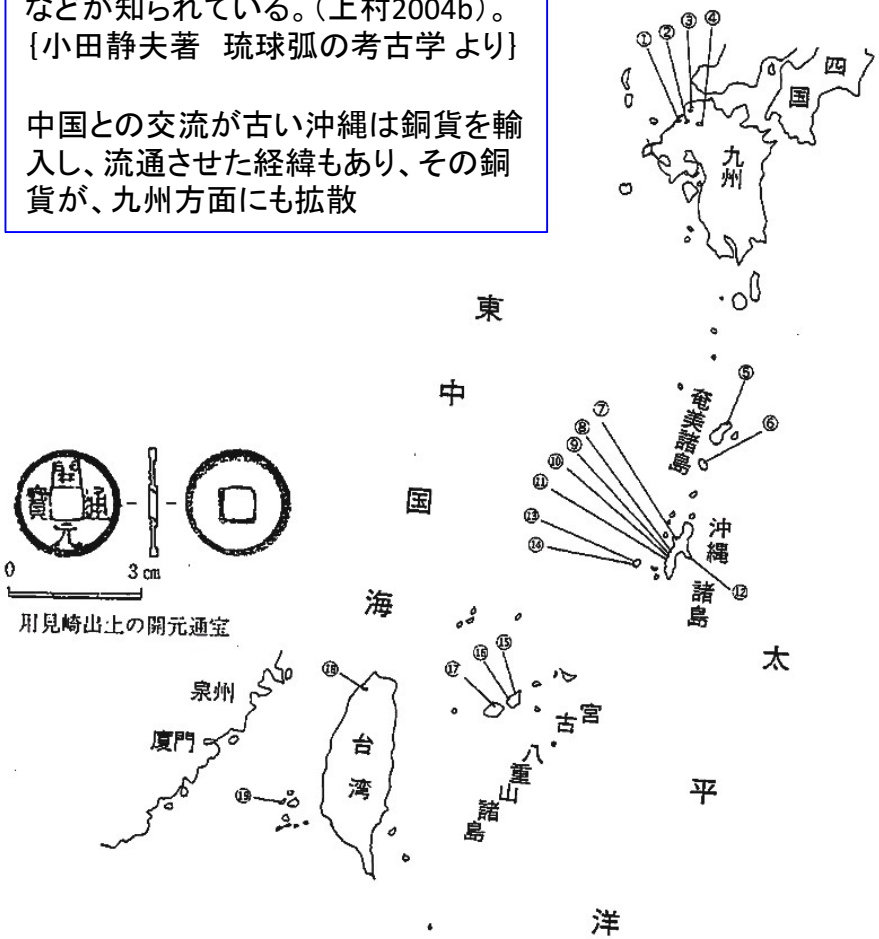
北海道・礼文島・船泊遺跡（3500年前）のでは、イモガイ・マクラガイや宝貝の装飾品が発掘された。
又、新潟県・糸井川産のヒスイも出土。
沖縄の貝が、縄文時代から日本海沿岸を通り、北海道北部まで運ばれ交易されていた。



貨幣の道 （7～ 9世紀）

中国貨幣が琉球弧からも出土し、その種類は戦国時代の燕の国で鋳造された明刀銭（紀元前3世紀）、前漢～隋時代の五銖銭、唐時代の開元通寶などが知られている。（上村2004b）。
{小田静夫著 琉球弧の考古学 より}

中国との交流が古い沖縄は銅貨を輸入し、流通させた経緯もあり、その銅貨が、九州方面にも拡散

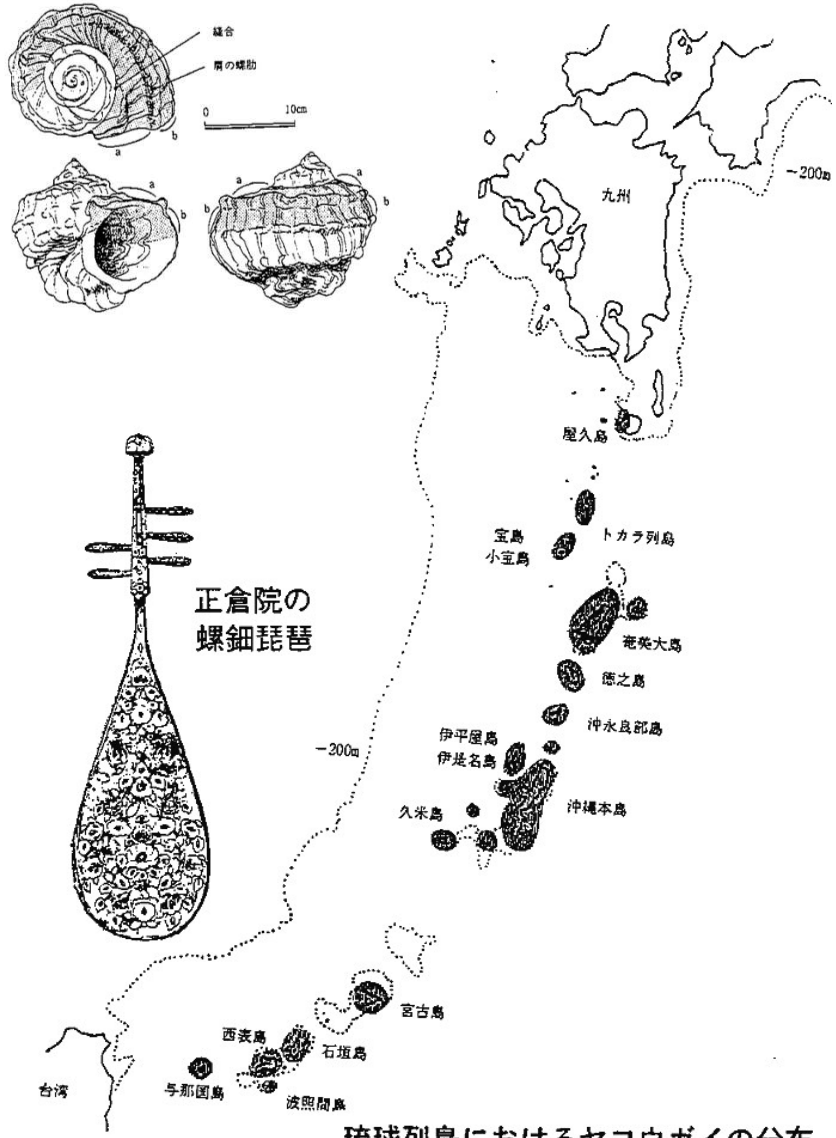


九州・琉球列島・台湾における開元銭の出土遺跡

沖縄と九州・本土との交易は続く

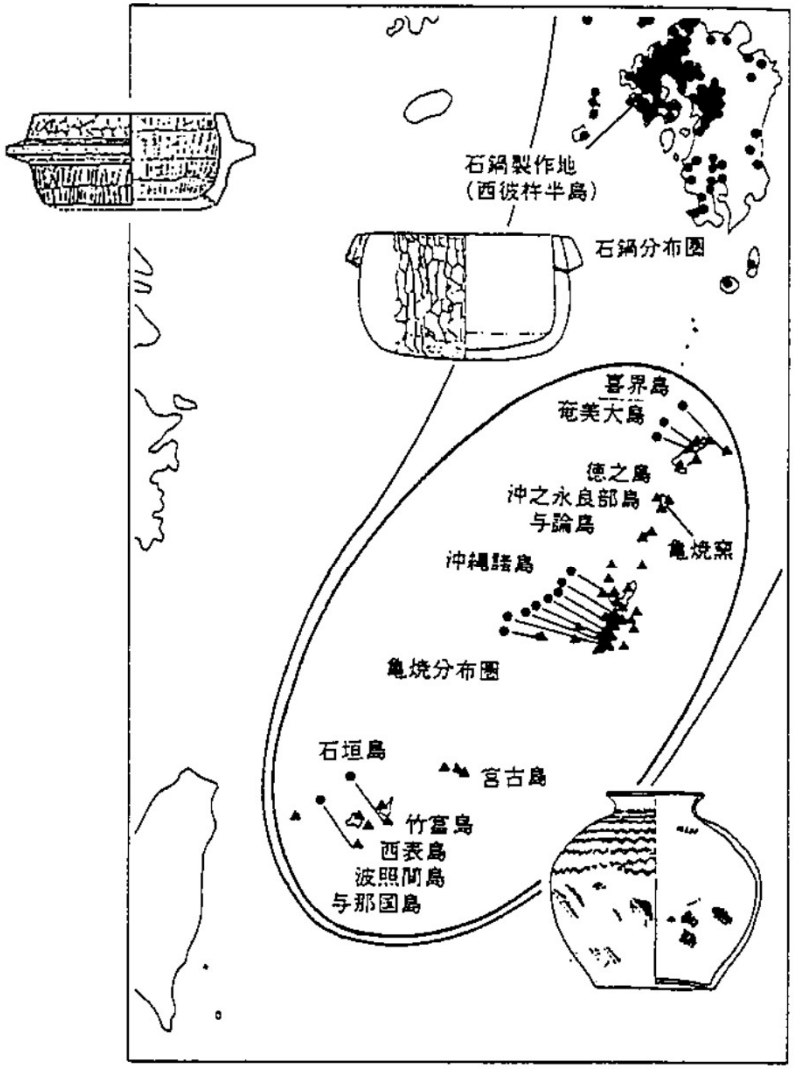
小田静夫著「考古学から見た新・海上の道」より
日本第四紀学会　第四紀の自然と人間2001・08

ヤコウガイの交易（7～ 14世紀）



琉球列島におけるヤコウガイの分布

滑石製石鍋・カムィヤキ交易（11～14世紀）



亀焼と石鍋の分布圏

中国の黒陶が九州で出土

- 河姆渡文化（7000～6500年前）：黒陶・灰陶など、1000度以上の高い温度で焼いたものが見られる。籾殻と稲、葦の茎と葉を炭化し、陶土に焼いたもの。黄河域の龍山文化期（5000－4000年前）の黒陶より以前。轆轤（ロクロ）で成型、表面を研磨し光沢を出した。

黒陶釜　河姆渡文化

大石遺跡・大分県豊後大野市
別府大学付属博物館所蔵

- 九州・熊本の複数遺跡で「縄文後期黒色研磨土器」が出土　（賀川光夫氏の同名レポートによる）
- 熊本県菊池市天城遺跡、福岡市四箇遺跡、大分県駒形遺跡、長崎県筏遺跡、宮崎県陣内遺跡など

縄文時代後期後半から晩期

（3200～2400年前）

- 周湟（溝・堀）で囲む集落構造を持つ
- 甕棺で埋葬
- 石包丁・石斧
- 天城遺跡では、米のプラントオパール検出

〔後期磨研土器Ⅰ式（三万田式）の集落立地と遺物〕

	遺跡	立地	集落			石器			石棒	土偶
			住居	溝	カメ棺	打製石包丁	石斧（石鍬）	石鏃	その他	
1	三万田	低丘陵	○	○	△	◎	○			○
2	天城	低地	○	○	◎	◎	○		△	○
3	四箇	低地	△	○	○	○				
4	筏	低丘陵	△	△	◎	◎	○			
5	駒形	高地	△	△		◎	○			○
6	陣内	高地				◎	○	○	○	○

◎ 多数　○ 普通　△ 存在

黒陶を移した民族は誰か？　　沖縄に移住した倭人

- 九州・熊本の複数遺跡で出土の「縄文後期黒色研磨土器」は、龍山文明の黒陶には見えない。
- 黒陶・紅陶・灰陶は、
  - 7000年前の河姆渡文化の中で作られ、
  - 5000～4000年前の黄河・龍山文化へと伝播し、洗練化。
- 九州へ伝播した黒陶は、初期の河姆渡文化時代の黒陶に見える。
    - 前頁の画像2つを参照下さい。
- 誰が黒陶を九州までもたらしたのか？
  - **轆轤（ロクロ）、集落の周囲を堀で囲むこと、米の穂刈の石包丁、**
    - **何れも弥生渡来人の技術・習慣。**
  - **甕棺は、勿論、倭人の風習。**
- 日本へ渡るためには、外洋航海の技術が必要。無ければ、不可能。
  - 魏の使節が邪馬台国へ来る10年前、呉は1万の軍を日本へ送り
    - 黒潮が中国からの航海を妨げた。
- 賀川光夫氏の龍山文明が九州へとした論文は、

  長江文明が九州への誤りと見る。

2007年『悠久の美-中国国家博物館名品展』のカタログより
←龍山文化黒陶

大陸の龍山文化と日本列島の黒色磨研土器分布圏

3200年～2400年前に九州に黒陶・甕棺をもたらしたのは
沖縄に渡来していた倭人と推定する。
先住民と倭人は舟を使い沖縄と九州の間を航海していた。

古代の「中国と沖縄・日本」の交流

- 二本の米・稲作に起源について：
  - 日本の古代米＝熱帯ジャポニカ米の、中国より　沖縄諸島へ入り、日本本土へ拡散
  - 日本の米の最も古い痕跡は、岡山で発掘された6400年前の稲プラントオパール
- 漆について：
  - 日本では、12,000年前に漆の枝が遺跡から見つかり、7000年前の漆製品が出土。
  - 中国の河姆渡遺跡では、約6200年前に漆椀が発掘された。
- 翡翠について
  - 約5～6000年前の土器と共に、ヒスイのペンダントが山梨県天神遺跡から出土。 →
  - 約3500年前の沖縄県兼城上原遺跡から翡翠が出土。新潟県糸魚川産の翡翠と判明。
  - 崧沢文化（紀元前3800年? - 紀元前3500年?）　玉による装飾品
  - 良渚文化（紀元前3500年? - 紀元前2200年? ）多数の玉器。
- 玦状耳飾の流行
  - 河姆渡遺跡などで6000 年前から4000年前まで、「玦」が流行し、衰退
  - 縄文時代前期（6000 年前から4000年前）に同様に流行し、衰退

「山形県内出土の玦状耳飾について」　小林圭一著より

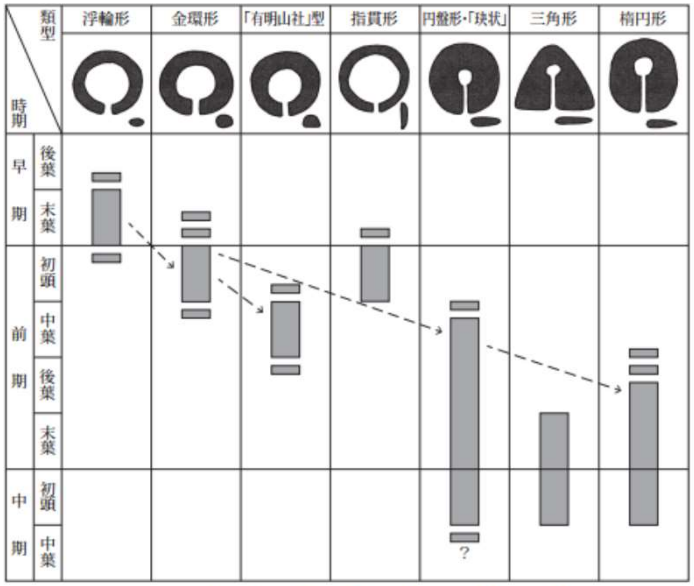
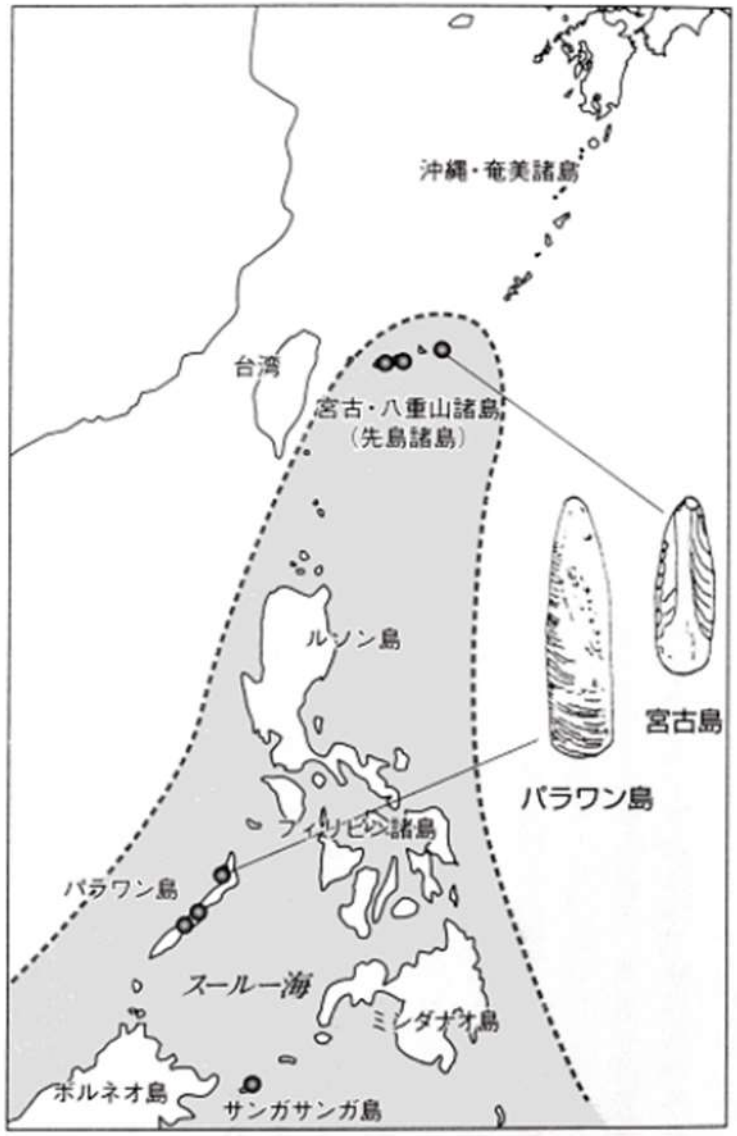


図１　玦状耳飾編年模式図（川崎 2004）改変

貝斧を伴う八重山の下田原式土器文化 ： 小田静夫氏のコメント

シャコガイ製貝斧の道



小田静夫著　遥かなる海上の道より

- 今回は③の「貝斧」について、当方が調べた内容をご報告します。
- 安里嗣淳氏は、フィリピンのバロボク岩陰遺跡の発掘調査に参加して、沖縄の貝斧（宮古島・浦底貝塚）について述べています。
- それによると、バロボク岩陰の下層（5,000年前）は無土器文化で、上層（2,500年前）は磨製石斧などが発見されました。
- 貝斧の発生に関して、
  - 下層の剥片貝器（打製貝斧）から、
  - 上層になって磨製石斧の影響を受けて研磨して「磨製貝斧」が出現し、
  - それが沖縄の先島諸島（宮古島、2,500年前）に伝播したと推定しています。
- フィリピンと先島の貝斧の素材は、大ジャコの蝶番部分を利用し、ミクロネシアの貝斧は腹縁部を使用することから、別の系統と考えられています。以上です。
- 　では、小田静夫拝

✓ 沖縄人がフィリピンに行き、磨製石斧などを示し、必要なスペックの貝斧を入手していたと推測された。

「宮古島アラフ遺跡のシャコガイ製貝斧と利器」（江上幹幸）2016/04/23

- 2003年12月、宮古島のアラフ遺跡で、シャコ貝製の貝斧が4点セットで出土した。4点がセットで出土したのは琉球弧初だった。これは、貝斧の埋納（デポ）遺構だったのだ。
  - （「宮古島アラフ遺跡のシャコガイ製貝斧と利器―貝斧埋納遺構の考察を中心に」「南島考古26号」2007）
- 4点の貝斧は刃こぼれを再調整した痕跡がないことから、これらが使用後であることは明確である。
  - 道具の形態が異なれば当然機能も異なり、これを敷衍して言えば、4点のセットがそろえば一連の作業を完了でき、何らかが製作可能であると解釈できる。
  - これらから推測すると、何らかの作業おそらく丸木舟の製作が終了し完了した後に、供養の目的で枝サンゴを供えて儀礼的に一括埋納したという解釈が可能である。

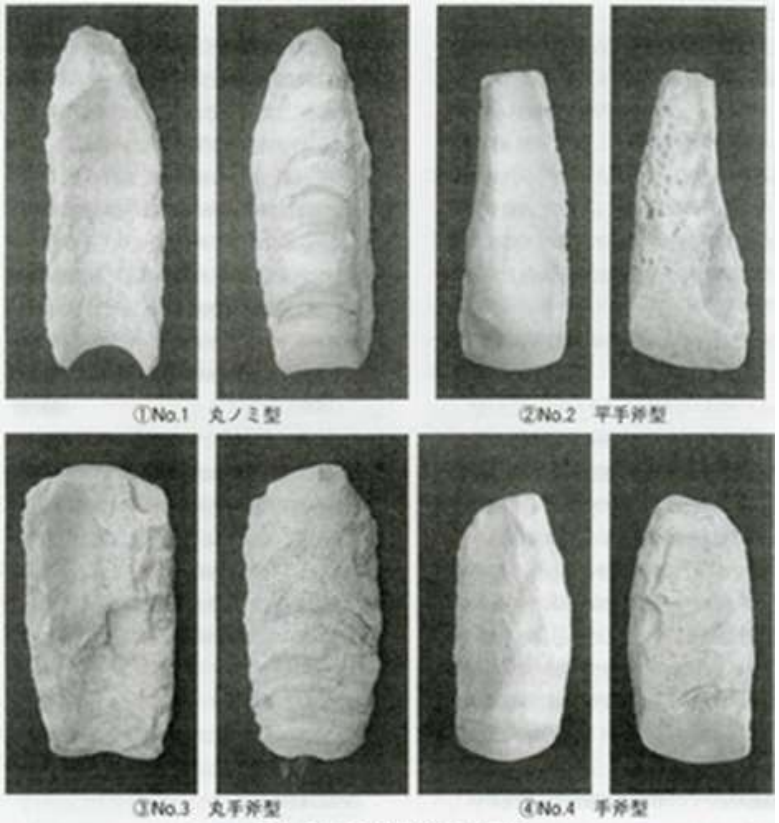
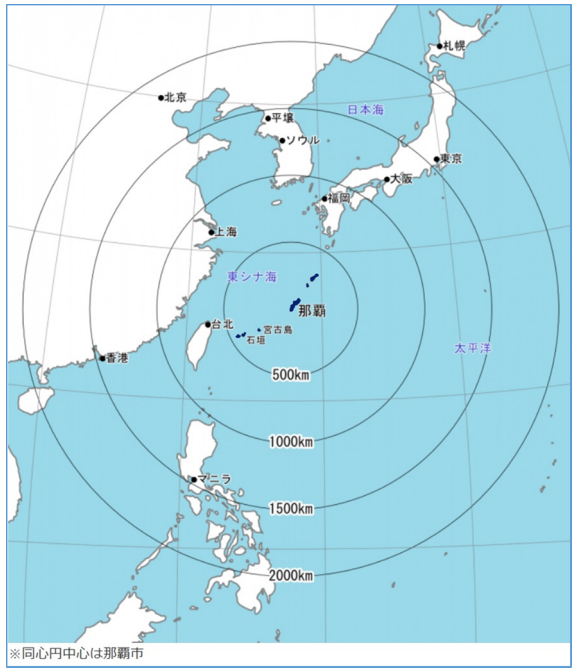


図5 貝斧埋納遺構の4点の貝斧

- No.1 丸ノミ型：刳（く）る（えぐる、くりぬく）。おそらくヒレジャコガイ
- No.2 平手斧型：平面を削る。オオジャコガイあるいはヒレナシジャコガイ
- No.3 丸手斧型：湾曲を削る。オオジャコガイあるいはヒレナシジャコガイ
- No.4 手斧：切る・削る

沖縄の古代人：2000kmの遠距離・往復・航海

- 八重山諸島・宮古島の沖縄古代人は、フィリピンまで行き、磨製石斧を示し、作らせた貝斧を宮古島に搬入し、使用していたことは、
  - 沖縄古代人は、2000kmの遠距離・往復・航海をしていたことになる。
  - この航海は、黒潮に逆らい横断する厳しい航海
  - 片道2000kmの往復航海は、動力・帆船の航海と推定
- 沖縄から2000kmの航海は、北に向かうと、
  - 東北・北海道がその範囲



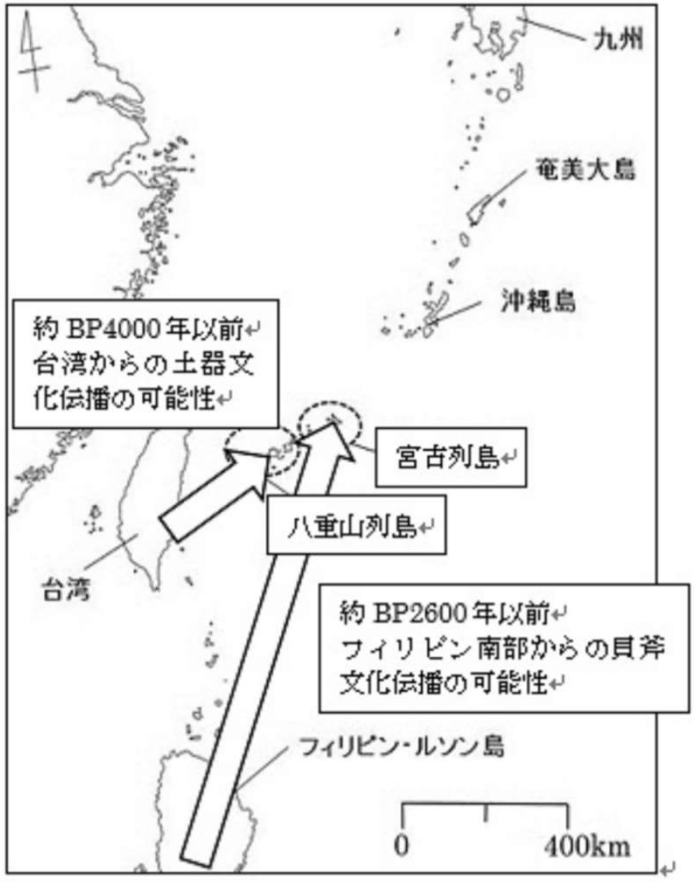
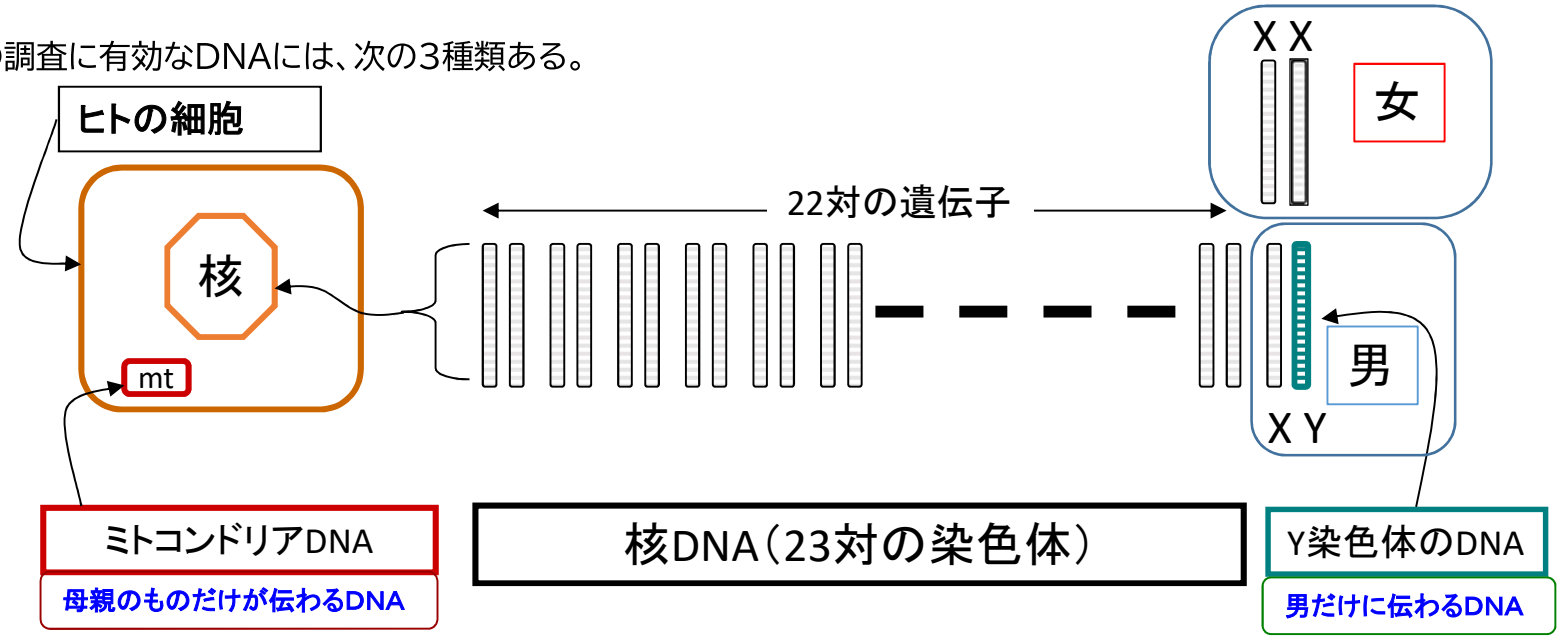


図 9. 既存の研究から示唆されている先史時代の宮古・八重山諸島の文化起源

宮古・八重山諸島先史時代における文化形成の解明：
遺跡属性と生態資源利用の地域間比較を通した文化形成の考察
山際海嗣(琉球大学)著　2016-03　　より　　→

ヒトのDNAで、起源を調べるために有効な方法は一種類ではない。

- ヒトの起源の調査に有効なDNAには、次の3種類ある。



- 3種類のDNAとは
  - 核〔ゲノム〕DNA （23対の染色体）:「父と母（男と女）のDNA」（遺伝子情報の大多数はこのDNA）
    - 人と民族の形質に最も影響の大きい。
    - **Gm血液型遺伝子**はこの一部。
  - **Y染色体のDNA　　：「父親から息子にだけが伝わる特殊なDNA」**
  - ミトコンドリアDNA（mtDNA）　：「母親のものだけが伝わる特殊なDNA」
    - ミトコンドリアは、細胞内で共生している別組織）
- 1種類のDNAだけを捉えて、ヒトの起源を論じても片手落ちで、3種類のDNA ＋ Gm遺伝子から示される全ての事実を整合したものが真実の姿となる。
  - ウィルスなどへの抗体も、貴重な遺伝情報で、これも有力な手掛かりになる。
- **今回①では「沖縄・宮古島の住人のDNA」について、上記のうち、Y染色体のDNAとGm血液型遺伝子を取り上げる。**

Y-DNA

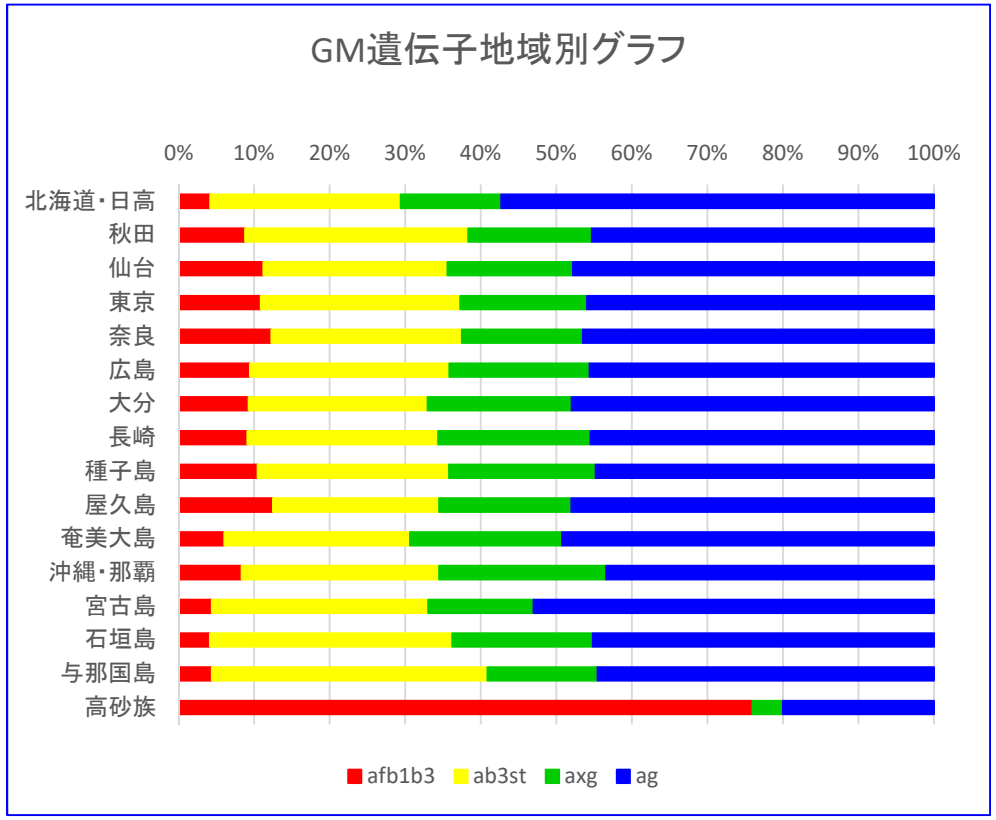
Y遺伝子　簡易表　日本・アジア
2014年10月Wikipediaより　抜粋・変換(100%換算)

		C		DE			NO						
		C1	C3	D1	D2	D3	N	O1	O2a	O2b 1	O2b *	O3	
日本（野中、水口）	日本	2	3	-	40	-	1	3	1	26	8	16	100
日本 (Tajima et al.)	アイヌ	-	13	-	87	-	-	-				-	100
日本 (Shinka et al.)	沖縄本島	4	-	-	65	-	-	-	-	14		17	100
	南沖縄	-	-	-	6	-	-	-	-	94		-	100
韓国 (Shin et al.)	韓国	-	10	-	-	-	4	4	-	-	32	49	100
東アジア北部 (Karafet et al.)	朝鮮	-	13	-	-	-	-	3	-	41		43	100
	漢民族（華北）	-	7	-	-	-	-	-	3	-	-	90	100
	チベット	-	4	19	-	39	-	-	-	-	-	39	100
東アジア南部・	漢民族（華南）	-	6	-	-	-	-	18	36	-	-	40	100
東南アジア （Karafet et al.）	漢民族（台湾）	-	-	-	-	-	-	14	9	-	-	77	100
	台湾	-	1	-	-	-	-	90	-	-	-	9	100
	イ	-	-	28	-	-	-	-	16	-	-	57	100
	ミャオ	-	4	7	-	-	-	7	11	-	-	71	100
	ヤオ	-	-	3	-	-	-	3	5	-	-	88	100
	タイ	-	-	-	-	-	-	-	89	11	-	-	100
	ベトナム	-	4	3	-	-	-	6	35	13	-	39	100
	マレー	-	13	4	-	-	-	11	34	-	-	38	100
	ジャワ	-	-	-	-	-	-	35	65	-	-	-	100

- 男だけに伝わる遺伝子「Y-DNA」を見ると、
  - D2がアイヌ・沖縄に多く、日本先住民＝旧石器人＝縄文人の遺伝子
  - NO系統が渡来系の人々のもので、特にO2b1は弥生渡来系の主軸の遺伝子
    - O2b1が、倭人の系統と推測される
    - O3が、中国漢民族の系統で、渡来時に含まれていたものと推定
  - O2b1・O2b、O2bに関して、調査時期が古い場合には、詳細な分析が伴わず、O2b1は、O2bと分離して検出で来ていない。 沖縄と南沖縄の項目に関しては、古い調査で、分離されていない。
- 沖縄本島では、D2の先住民の系統が大多数で、O2bの倭人と、O3の漢人がやや多い
- 南沖縄（宮古島を含む先島諸島）では、O2bの倭人が大多数で、極少数の先住民がいる。
- **宮古島を含む南沖縄は、日本全体とは異なった、Y-DNAの構成を持つことが注目される。**

血液型遺伝子（Gm遺伝子）の示す宮古島の特異性

- 大阪医科大学学長・松本秀雄著「日本人は何処からきたか　血液型遺伝子から解く」 NHKブックスの記述より
  - Gm遺伝子の研究を行なった松本秀雄博士の「色分けした円グラフ」のデータを思い出して欲しい。
  - 左記の表は円グラフを横棒グラフにしたもの。
- 赤で示したafb1b3に注目
- 宮古・石垣・世那国では、赤が非常に少ない。
- 松本氏は、先島諸島の人々の血液を調べ、この人々は、アイヌと同じ古い・純粋な民族であると、上記の著書で、記した。
- 先島諸島では、古くからの純粋な民族が住み続けてきたことを示している。



Y-DNAとGm遺伝子の両方を見ると、

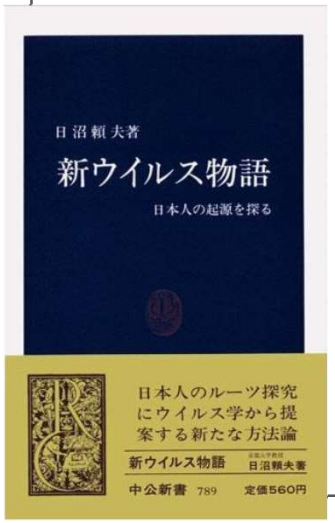
- 沖縄の宮古島には、古い・純粋な倭人＝弥生渡来人の主要な民族のDNAが残されている。
- 日本本土とは、別個に考慮されるべき特異性といえる。

ATLウィルス(白血病)

- このウィルスのキャリア(感染経験者)は
  - 沖縄(琉球人)で33.9%、
  - 北海道のアイヌで45.2%で多く見られ、
  - 九州が7.8%とやや多く、
  - 四国—本州では1%未満のところが多く、
  - 東北では1%となっている。
  - その外に、九州の宮崎県・鹿児島県・長崎県の離島海岸地域、四国・隠岐・紀伊半島南端・東北の飛島・牡鹿半島・山陸海岸などの僻地に多く発見された。
- 日沼氏は、現地調査を行い、

非常に古くから居住し、人の混血の機会の少なかった離島や半島先端などと沖縄・九州・北海道に、キャリアが発生していることから、日本の先住民がこのキャリアを持ち、その後、日本に、移り住んだ人が混血すると、キャリアにはならないことを示した。

- **日本先住民の純粋な子孫のみが、罹る**
- **沖縄のうち宮古島の人たちだけは、ATLウイルス・キャリアが極端に少ない。これは、宮古島人は沖縄の外の島と違って、日本先住民ではないからであろう。**



新ウイルス物語:日本人の起源を探る
日沼頼夫著

第三章　ATLウイルスのあらまし

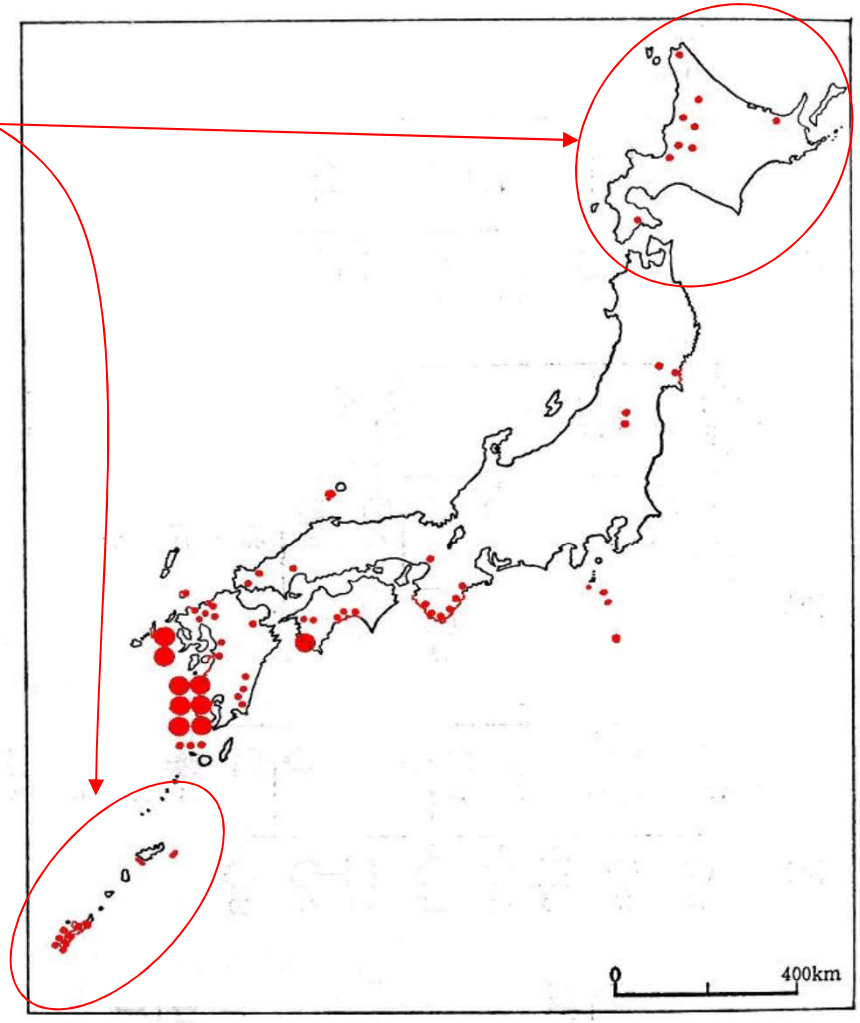


図12　ATL ウイルス抗体陽性の ATL 患者の日本国内分布（1982年調）．大きい丸は10例，小さい丸は 1 例．

琉球語・日本語について

- 日本語と琉球語の分離時期　従来の学説
  - 琉球語（琉球方言）と日本語（本土方言）が分かれた時期は、紀元前後以降、奈良時代以前と考えられている。
    - 言語学者の服部四郎は、二言語間の共通の語彙を比較する言語年代学の手法を使って、京都方言と首里方言の分岐年代について1,450～1,700余年前という計算結果を示している。
    - 安本美典氏は、基礎語彙200単語をリストし、比較。日本語と沖縄首里方言では128語が一致する。これは1750年前ごろに分かれたことになるとしている。
  - トーマス　ペラード氏　の「日琉祖語の分岐年代」による（2012 年2 月19 ・20 日　京都大学で発表）

    （フランス国立科学研究センター、 言語学 研究センター

    主な研究分野は、琉球の言語と日本語の記述言語的歴史的言語学）

    音韻・文法・漢語の借用などを評価し、上代日本語にも残存しない日琉祖語の特徴が有ることを指摘。
    - 「上代語に残影さえない音韻対立を考慮にいれると，日琉祖語の分岐時代が「8 世紀以前」，つまり日本の有史以前」と記す。
      - 「8世紀以前」とは、日本語の歴史の文献資料が遡れる最も古い時期より前との意。
      - どの位古いかは示していないが、論理的な明快な解釈。
- 日本語と琉球語の分離時期について最も信頼できるのは、トーマス　ペラード氏の、日本語の資料の存在時期より古いとする説。
- 丸地の考える説

  - 琉球語は、凡そ7千年前、長江河口付近に居た倭人達が使っていた言語・倭語。
    - 7千年前は、ハヒフヘホは、パピプペポだったようだ。
    - 沖縄列島の各島で、先住民と倭人の比率が違い、言葉の混じり方も異なって、各島の言葉に違いが出た。
  - 日本本土の日本語は、長江河口から淮河へ移動、その間の5千年間で、中国国内で変化し、日本へ移住。
  - BC200年頃、日本に渡来した時点で、琉球語とは、5千年間分、離れていた。

現在公式に採用されている沖縄の歴史と最新科学の示す歴史の差 ①

- 現在、宮古島市史など公式に採用されている歴史：現在有力な歴史は、
  - 発掘された人骨の示す旧石器時代の人は、絶滅し、
  - 縄文時代に九州から本土人が移住し
  - 有史時代になって、農耕を持った弥生人が九州から移住し、
    - 人も文化も本土から渡って来たことになっている。
    - 旧石器人の絶滅は、港川人の骨に残されたハリス線が証拠で、沖縄の島は、生存が難しいことを示しているとした。
- 最新科学の示す結果は
  - 絶滅したとされる時期は、氷期の最厳寒期を越え、気温が上昇し、海面は低い時期で、島としては面積が大きかった時期に当たり、居住環境としては、最も良好な時代で、絶滅とは無縁の時期。
  - 最新の、白保竿根田原洞穴遺跡の発掘成果では、考古資料の断絶の時期は下記の２時期。
    - 1.3～1.1万年前　　・ 8～5千年前
  - 1.3～1.1万年前について：1万4千年前から7千年前まで、沖縄から九州へ盛んに移住が行われて時期で、沖縄側の人の絶滅は無い
    - この時期には九州は、2万９千年前：姶良カルデラの火砕流と火山灰で九州・四国・中国の人が消失して、植生や人がやっと戻り始めて来た時期。
    - 1万1千年前：桜島サツマ火山灰で、南九州は灰に埋もれ絶滅した時期
    - 7千3百年前：喜界カルデラの破局的噴火で、九州・四国・中国の縄文人が絶滅。
      - 従って、沖縄から九州への人の流れはあっても、九州からの人の流れは無い。
  - 8～5千年前　7000～2500年前の沖縄の土器群が連続性をもって発掘されており、断絶は無い。

現在公式に採用されている沖縄の歴史と最新科学の示す歴史の差 ②

- 宮古島・八重山諸島(先島諸島)で出土する下田原式土器と貝斧を検討すると、沖縄の磨製石斧が見本となりフィリピンのバロボク岩陰遺跡では、貝斧を生産していることが判った。
  - 沖縄から、黒潮を越えて、2000kmの遠距離を往復航海したことが判明し、沖縄人の航海能力が実証された。貝斧で製作されたものは、丸木舟と推定される。帆をはったサバニにより、長距離、外洋航海を行っていたと推定される。
  - 2000kmの外洋航海の能力は、北の北海道まで、沖縄人が航行し、活動で来たことを示す。
    - その交易の結果と見られる品々の移動が見られる。
      - 北海道・船泊遺跡の貝製品　・ 糸魚川原産のヒスイが沖縄へ、更に長江流域へ
      - 黒曜石が沖縄へ　・曽畑式土器/一木式土器が奄美・沖縄へ
      - イモガイ/マクラガイなど貝製品が九州・本州へ　中国古代貨幣が、沖縄・九州・本州へ
      - 九州の黒陶　・ 陸稲米作/雑穀畑作が九州などへ
- 沖縄諸島では旧石器人の絶滅は無く、磨製石斧・貝斧・丸ノミ型石斧で作られた丸木舟：サバニが世界最高の航海能力を示す船型に昇華し、帆走に使われ、海洋交易がおこなわれていた。
- その沖縄人には、旧石器/縄文系の人々と共に、極めて古い時期から、弥生人＝倭人が居たことが、遺伝子・DNA解析から判明している。

- 柳田国男の「海上の道」で期待された宝貝・稲作を持った人の沖縄からの渡来の夢は、可能性が十分にありそうに見える。
  - 機会が有れば、この宝貝と倭人について、お伝えしたい。

港川人のmtDNAの話題

- 2021年6月16日にプレスリリースが行われた。港川人のミトコンドリアDNAが解析され、日本列島人の遺伝的関係性が解明できたとする論文が、英文科学雑誌に掲載された。
- このリリースを受けて、読売新聞と朝日新聞が逆の内容の記事を出した。
  - 読売新聞：港川人（約2万2000年前）がDNA分析の結果、遺伝的に縄文人や現代日本人の直接の祖先ではないことがわかった。
  - 朝日新聞：ご先祖は、2万年前の港川人？　DNA解析、日本人につながる可能性

- この相反する新聞記事は、今回の沖縄の歴史に大きく関わる処なので、何故、このような相反する内容が報道されることになったのか、検討してみる。
  - 検討材料は
    - 新聞記事：朝日新聞/読売新聞/大学ジャーナル
      - 日本人類学会のHP　https://anthropology.jp/　の人類学関連新聞等最新記事MORE＞にオンライン記事・デジタル記事を見ることができますので、が参照下さい。

✓ 朝日：https://www.asahi.com/articles/ASP6F4FX4P6BULBJ016.html?iref=comtop_7_02
✓ 読売：https://www.yomiuri.co.jp/culture/20210613-OYT1T50142/
✓ 大学ジャーナル：https://univ-journal.jp/101269/

- プレスリリース原文：　https://www.toho-u.ac.jp/press/2021_index/20210616-1140.html
- 日本学術会議のシンポジウム2019年07月28日の発表レジメ
  「港川人のミトコンドリア DNA 全塩基配列からわかること」：
  https://www.jstage.jst.go.jp/article/tits/25/2/25_2_38/_pdf/-char/ja
- 論文情報：【Scientific Reports】Population dynamics in the Japanese Archipelago since the Pleistocene revealed by the complete mitochondrial genome sequences
- 上記の日本語訳（Googleの翻訳機能を使い丸地が翻訳したもの）

朝日新聞

2021年7月23日（金）

の記事

7月23日（金） 朝日新聞 第3種郵便物認可

ご先祖は 2万年前の港川人？

DNA解析 日本人につながる可能性

沖縄県で約2万年前の全身骨格が見つかった港川人（ぱ）＝☞＝は、現代の日本人につながる祖先だったかも知れない。そんな可能性がDNA解析からわかった。日本人のルーツは、土着の縄文人と大陸からの渡来人による「混血説」が定説だが、さらに古くまでさかのぼる可能性が出てきた。

扉

日本人の起源は、約1万5千年前から約3千年前にかけて北海道から沖縄まで広く分布していた縄文人と、その後に大陸からやってきた渡来人が混血した弥生人にさかのぼることが、DNA解析などから裏付けられてきた。

一方、縄文人より古くからいた港川人との関係ははっきりしていなかった。というのも、出土した人骨や遺跡だけでは、港川人が別の土地へ移ったり、途絶えたりした可能性もあり、直接の祖先とは限らないからだ。港川人の顔の骨格が縄文人とあまり似ていないこともあり、論争になってきた。

総合研究大学院大や東邦大などの研究チームは、解析が比較的やりやすい細胞の小器官ミトコンドリアのDNAを用いる手法を採用。保存状態がよく全身骨格が残る港川人1号の右大腿骨（たい）からDNAを抽出し、初めて分析に成功した。

？

ミトコンドリアDNAは母から子に受け継がれる特徴があり、その際に起きる突然変異によって親子でもわずかな違いがまれに生じる。DNAに残るこの痕跡を比較すれば、その個体や集団の系統をさかのぼれる。

分析の結果、港川人1号は、現代の日本人や縄文人、弥生人に共通して多く見られるタイプの遺伝子の祖先型の特徴を持つことがわかった。港川人の子孫の系統が途切れることなく、現代に続いている可能性を示唆するものだ。

一方、分析した現代の日本人約2千人の中に、港川人1号と同じ遺伝子の特徴を受け継ぐ直系の子孫はいなかった。

チームの五條堀淳・総研大講師（自然人類学）は「日本列島のヒトの集団は、旧石器時代から現代に至るまで、遺伝的につながっていそうだ」と話す。研究が進めば、現代日本人の中から港川人の直系の子孫が見つかる可能性もあるという。

！

港川人1号は身長153㌢で、成人男性としては小柄だった。頭骨の分析から、こめかみの筋肉が発達し、下あごの骨も頑丈だったことがわかっている。歯も丈夫で、特に奥歯を支える歯根が太くて長かった。近くの別の洞窟からは、2万3千年前の巻き貝で作った世界最古の釣り針や、カニの爪、ウナギの骨などが見つかっている。

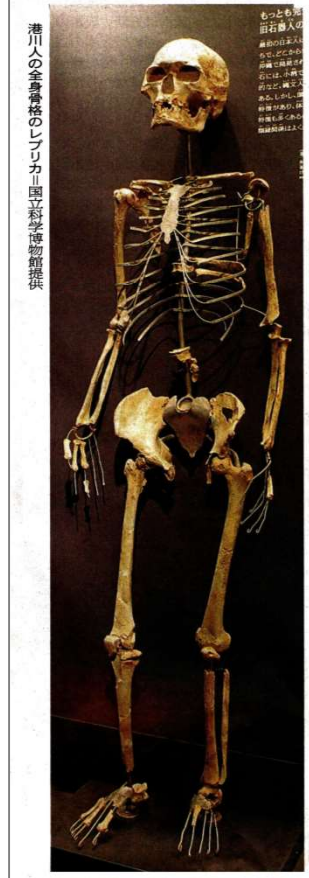
国立科学博物館の馬場悠男・名誉研究員（人類形態学）は「ネズミや魚は骨がついたまま、木の根などの硬いものもバリバリとそのまま食べた。料理は火であぶる程度だっただろう」とみる。

頭骨からわかるのは、ごつい頭の形やみけんの出っ張りなど深い彫りを持つ特徴が、約20万年前にアフリカで生まれたホモ・サピエンス（新人）の古い姿を残している点だ。豪州の先住民や、インドネシアで発見され、頭骨に原始的な特徴を持つワジャク人ともよく似ているという。

馬場さんは「約4万年前にアフリカから東アジアに渡って孤立し、古い特徴を残しながら環境に適応して港川人になったのでは」と推測する。

五條堀さんらの研究チームは、ミトコンドリアより情報量が多い細胞の核DNAの解析を港川人1号で始める計画だ。うまくいけば、日本人のルーツと港川人の関係をより明確に知ることができるという。

（石倉徹也）



港川人の全身骨格のレプリカ＝国立科学博物館提供

港川人の顔の復元図＝国立科学博物館提供、山本麗也氏作画

東京大総合研究博物館提供

左の写真は人類学ミュージアム、松下孝幸氏提供

港川人

1970年、沖縄県八重瀬町のフィッシャーと呼ばれる岩の割れ目から、約2万年前の旧石器時代の男女4人の全身骨格が見つかった。発掘場所の地名から港川人と呼ばれる。小柄で華奢な上半身に対し、頑丈な骨格の足腰やあごを持っていた。平地が少なく起伏の激しい島内を集団で放浪しながら、採集狩猟生活をしていたとみられる。旧石器時代の全身骨格が日本で見つかるのは極めて珍しい。

発見者の那覇市の実業家、故・大山盛保さんは、人骨発見の3年前に現地でイノシシの骨を見つけた。それ以来、「追ってきた人間の骨もあるはず」と発掘を続けていたという。

発掘調査が進む港川フィッシャー遺跡（1968年12月）。港川人の全身骨格は70年、中央の割れ目（フィッシャー）の中から見つかった＝馬場悠男さん提供